ト行かうとする。六三、長兵衛へちよつとかゝるを、おその支へて

その腹は立たうが、どうぞわたしに

六三　エヽ、退いてゐろ。その短刀は

長兵　イヽヤ、やらぬワ。

ト三人奪ひ合ひ、六三は手に當る道具箱の鑿を取つて無暗に打つてかゝる。おその、その手に取りつき

そのアヽコレ、怪我させては、却つてお前の

ト無理にもぎ取り、投げる。この鑿、長兵衛が顏に當り、疵つく。

長兵　アイタヽヽヽヽ。うぬ等ア寄つて、おれをこりやア殺すのか。……コレ〳〵〳〵、このげん鑿で疵を附けたな。斯うなつては、もう〳〵やらぬ。うぬが欲しがる短刀は、このげん鑿で、斯うして

ト鑿を持つて短刀をしたゝかに打つ。似せ物ゆゑ、白刃捻れて、柄許よりポツキと折れる。

エヽ、これで餘ッほど腹が癒えたわえ。

ト投げつける。六三取つて

六三　ヤ、、、、、折紙添へたるこの短刀、もし天國に極まれば、掛けがへもなき千葉家の重寶。

その　白刃の面を打ち叩き、殊には折れて此やうに

長兵　それがうぬらへ腹癒せだワ。

六三　尋ねる品もこの如く、無法邪慳な長兵衛が……阿母様への申し譯。もう助けては

ト俎板の上にある、誠の天國を鉈にしたるを取つて

鳥の骨さへ切れる事なら、うぬ、長兵衛が肩骨脊骨。

ト長兵衛が肩先をしたゝかに切る。長兵衛「ワツ」と云うて倒れる。乘りかゝるのを、おその抱きとめる。立廻り。長兵衛は、やう〳〵起上がり

長兵　ヤア、切つた〳〵。大工の六三が人を殺す。

その　アヽコレ、それを

六三　息の根とめて

ト又したゝかに切る。これより雨車、常磐町の騷ぎ、好みの合ひ方にて、三人立廻りよろしく、長兵衛、深手を負うて、よろめき廻り、おきぬが脱いで置いたる平常着の小袖を枷に、立廻りのはずみ、長兵衛、片袖を引切り、掴みたるまゝ倒れる。おその、蒲團をかぶせる。雨車やむ。六三、思ひ入れ

あつて、件の鉈にて死なうとする。おその、その手に縋つて

その　アヽコレ、六三さん、お前は何で死なしやんす。

六三　コレ、おそのさん、これが死なずに居られうか。正しくこれかと思ひし短刀、刃金もこぼれて折れたる上は、阿母様へどうマア云ひ譯。殊に怪我とはいひながら、この長兵衛はおきぬが親、舅を殺したこの六三、けちな死ざま見せんより、有りあふ鉈で腹切つて

ト死なうとする。おその、取りつき縋つて

その　サ、尤もでござんすが、假にも舅の長兵衛どの、殺した科と死なんしては、跡へ殘りしわたしと母さん、誰れを力に短刀の、詮議した上稻野谷の、跡目を立てませうぞいなア。コレ、死ぬるばかりが男でもござんすまい。それとも死ないで叶はずば、わたしも一緒に、お前の手に掛け、どうぞ殺して下さりませ。

六三　サア、人殺しより六三めが、死なねばならぬはお前の腕。

その　エ。

六三　コレ。

ト思ひ入れあつて、おそのが彫り物をまくり

お主の娘と知らぬ身の、ひよんな事から假り枕、洒落が高じて此やうに、六三女房と入れ墨の、家來のわしが一生の、疵物にした科人ゆゑ、どうも死なねばなりませぬ。

その　お前が死なうと云はしやんすりや、なんぼ主でも家來でも、腕に彫つたわたしが女房、どうして生きて居られませう。サ、お前が殺して下さんすりや、わたしが爰で

ト鉈を取上げ、死なうとする。六三とめて

六三　尤ものその詞、是非がない。いかにもわしが主人のお前を、手にかけたその上で、死んでしまふが申し譯。そんなら此まゝ

その　互ひに死ぬる、用意は爰に。コレ

ト おはんが小袖を出し

妹が形見。

六三　囘向の仕納め。

その　お前も亂れた

六三　鬢のほつれを

その　ドレ、撫でつけて。

ト思ひ入れ。六三、鉈へ手をかけるな、おその、きつと留める。時の鐘、妻き合ひ方になり、おその奥へ思ひ入れあつて、頭の櫛にて六三が鬢を撫でつける。この合ひ方をかり、向うより幸左衞門、頬かむりにて出てくる。この帶に、おきぬ取りつき、跡より市助、權九郎、勘六、附いて出て來り、花道にて

幸左　コリヤおきぬ、屋敷へ參ると見せかけて、われに賴んだおそのが身の上、必ずともに手引きして身共に渡せよ。其方が爲にも仇ある女、道々云つたを忘るゝな。

ト耳に口寄せ云ふ。おきぬ、思ひ入れあつて

きぬ　お氣遣ひなされまするな。仕負ふせてあげませう。

市助　モシ、旦那、外でおそのが身請けをさせ、お前の方へ揚げ玉の

勘六　その手番ひでは、わしらも共々。

權九　折角ものした百兩の、金も魚を見失ひ

幸左　無駄骨折つたその代り、われも働らけ。

權九　呑み込みました。

勘六　わしは向うのしがく場を

幸左　必ずぬかるな。
勘六　合點だ。
ト捨て鐘、合ひ方になり、勘六、向うへ入る。おきぬ、探り〳〵門口へ來り、三人は囁き合ひ、路地口に入る。おきぬは門口をさつと明けて
きぬ　ハイ、お世話様でござりまする。
トこれにて兩人驚き、死骸を圍ふ。おきぬ、探り〳〵、内へ入り
これはしたり、六三さん、どこに居なさんすえ。
トこれにて六三、思ひ入れあつて
六三　オヽ、おきぬか。なぜ、お屋敷から戻つた。
トおきぬ、こなしあつて
きぬ　サイナア、聞いて下さんせ。お屋敷へ連れられて參つたところ、肝腎のお客さんが、明日に延びたによつて、明日上がれと、權柄な云ひつけ。
六三　ヤ、合點のゆかぬおきぬの詞。よもや屋敷へ同道せし、幸左衛門が其まゝにそのぬしを歸さう筈もなし、これには大方

六三　コレ。そんなら明日上がれとか。
きぬ　アイ、それでわたしや戻つたが、勿怪の幸ひ、お屋敷でお賴みは、「八重霞」の道行場、久しう浚はず置いたゆゑ、とんと忘れて居たものを、意地悪うお好みゆゑ、浚うてゆかずばなりますまい
慥か三味線、本も爰らに
ト探り〳〵、蒲團を探り見て
ヤ、誰れか寢て居なさんす。阿母様かえ。モシ、轉寢して、お風召しては……サ、ほんまに此方へ。
ト何心なく蒲團を捲り、長兵衛が件の片袖を握り、臥したる死骸を、おきぬ見て「ヤア」と云はうとして、物に紛らし、思ひ入れ。六三、手早く蒲團をかぶせて
六三　爰には誰れも寢ては居ぬ。必ず起すに及ばぬよ。
ト云ふな、おきぬ、聞きつけし思ひ入れにて
きぬ　アヽ、阿母様ぢやござんせぬか。そしてマア、誰れさんが寢てぢやえ。
六三　サ、爰に寢て居るは、アノ、ソレ、いつも凌ひに見える、伊勢久の若い衆サ。
きぬ　あなたがマア入り口に、前後他愛も……ホヽヽヽ、いかう醉ひなさんしたと見えるわいなア。

……モシ、三味線や本はござんせぬかえ。

ト探るとて、折紙を探り當て、思ひ入れあつて

アヽ、こりやコレ、どこからか、彈初めの摺り物が出來てかいな。ほんにマア、ちつとのうち居ぬと、此やうにマア取りちらして。彈初め浚ひは、お互ひの事ぢやによつて

ト折紙を懷中する。六三見て

六三　ヤ、その折紙を

ト取らうとする。おきぬ、その手を捕へて

きぬ　三味線わえ。

六三　アイヤ

トつかへる。おその慄ふ。

きぬ　調子が合してあるかしらぬ。

トあたりを探る。六三、おそのをキツと捕へて、三味線と撥を片手にて取り

六三　ほんに、爰にあつたわいの。

ト目先へ突きつける。おきぬ、探り取つて

きぬ　オヽ、よう取つて下さんした。本はあつても夜に入ると、見えぬ鳥眼の垣のごぎ、ドレ、浚つて置かうか。

ト調子を合す。六三、おその、ホロリとして

その　とても二人は死ぬる身の、今際の際の妹が形見、せめて着替へて最期の曠れ着。殊にお前の大事の男、六三さんと二人して、心中するを見ながらも、いとしや鳥眼の病にて。

トおきぬへこなし。

六三　側に居ながら見聞きさへ、叶はぬのみか剩つさへ、親を殺され御主人の、この娘御と心中と、跡にて聞かばさぞやさぞ、恨まん事の、可哀や女房。

その　女子の道に違うたおその、この云ひ譯は未來から。モシ、お赦しなされて

ト手を合す。

六三　コレ。形見の小袖を

ト思ひ入れ。

きぬ　(淨瑠璃を語る)「手を引き合うて水入らず、死にゆく身の妹背鳥、千日寺へと辿りゆく、おそのは所體ほふ〳〵と、しをが形見風呂敷に、包むとすれど目に洩るゝ、涙は袖に三津寺の、觀音樣の

御縁から、實にや大悲の御誓ひ、暗きに迷ふ我れ〳〵を、救ひ給へと伏し拜む、世の諺に違ひなし、わしもお前も數へて見れば、丁度十九と二十五の、厄の祟りか神の罰、重き罪科あるならば。

ト これを彈き語りのうち、おその、おはんの小袖を着る。六三、帶を締めさせ、いろ〳〵あつて、件の鉈を取上げ

六三　死ぬる支度を露知らず、側で浚ひの八重霞。

その　おその六三の道行を、一口なりと彈き語り、物が云はする惡緣か。

六三　お主の娘を手にかくる、これも不思議な緣結び。

その　あの母さんの御存じないうち

六三　未來は一つ

その　蓮の臺。

六三　さはいへ主人の

ト 見詰めて思ひ入れ。

その　氣遲れしてか。

六三　是非に及ばぬ。

ト おそのが胸づくしを取つて突き立てようと、鉈を持ち直す。

きぬ　六三さん、待つた。

六三　ヤ。

ト 振りかへる。

きぬ　わたしは親を退けば他人、遺恨によつてはそりや有うち。腕に殘る彫り物も、知らぬ昔は是非がない。コレ……いとほしなげにおそのさん、お前の手にかけ先の世まで、主殺しの惡名は、どこで拭はうと思はしやんす。

そのすりやアノ、お前は

六三　そんなら病氣は

ト 持つたる鉈を思はずバツタリ落し、惚りする。おきぬ、ツカ〳〵と寄つて、件の鉈を取るより早く長兵衞が死骸に駈けより

きぬ　親子といへど敵同士。

ト 額を外けて止めを刺す。雨車烈しく聞える。おきぬ白刃をキツと見る。

六三　すりや、この程の怪我というたも

きぬ　聾の早耳。

その　お前の鳥眼は

きぬ　わたしへ遠慮させまいばつかり。

六三　見えぬ兩眼、怪我せし耳も

きぬ　エヽコレ、聞えぬわいの六三さん、エヽ、お前はなう。

ト合ひ方になり、おきぬ思ひ入れ。

親を殺した天下の科人。されども正しくこの白刃、血をあやすれば俄の春雨。正しくお前の、詮議なさんす

六三　もしや尋ぬる

ト巻きたる鉈の繩を取り捨て、キッと見て

ヤヽヽヽ、鉈菜刀と思ひしに、銘はしつかり天國と、世にも鋭き刃金の鍛え。

その　そんなら最前打ち折りし

六三　この短刀は、眞赤な似せ物。

ト折れたるを取上げる。

きぬ　長兵衛どのが正銘の、この折紙を證據にして、似せたも矢ッ張り日頃の惡心。短刀知れたる上からは、折紙添へて。

ト六三に渡す。

六三　して又おきぬが、鳥眼と云うたは。

きぬ　お前と譯あるおそのさん、わたしへ遠慮と思ふから、粹を通して此方から、見えぬ顏したばつかりに、出てする業も我が内で、目にかゝつたがわたしが仕合せ。この程兩國廣小路で、思はぬ怪我を幸ひに、耳が遠いと色氣なう、僞り云うたも親ながら、心の惡い長兵衛どの、惡事を聞き出す淺はかな、女子の智慧の拵らへ事、それゆゑにこそお尋ねの、德次郎といふ盜賊こそ、既にわたしが一日も、親に連れられ鎌倉の、帶屋を出した長右衛門どの、おはんさんと二人連れ、死んだというたは皆僞り、姿を變へて針の宗庵。めぐる因果は稻野谷の、お前の親御を手にかけた、親の敵をおはんさん、討てどもそれは内證事、罪は遁れぬ人殺し。わたしが密かに伴なうて、預けた先も男氣な、お方を賴み、これ程も、外へ洩らさぬ深切を、いかにお前の氣に入らぬ、女房とても胴慾な、そりやあんまりぢや六三さん、これいなァ、お前はつれないお方ぢやなう。

トきつとこなし。よき時分、奥より幸之進出かゝり、立ち聞く。

はんすりや、父さんを殺したる、その新藤の徳次郎、妹のおはんが、かよはき小腕に

六三 敵を討てどもこれといふ、證據なければ人殺し。

きぬ サ、その人殺しはこのおきぬ、假の夫の長右衛門、義理ある親の長兵衛どの、親と夫を殺せし大罪。

トこの時幸之進、ツカ〳〵と出て

幸之 すりや、長兵衛を手にかけしと、自身の白狀。して、その證據は。

きぬ 卽ち死骸に殘りし片袖、これはわたしが着替へのちぎれ。

ト死骸の持つたる片袖を取つて差出す。幸之進見て

幸之 健氣な女……合點のゆかぬは。

ト思ひ入れあつて、落ちたる繪符を取上げ

こりやコレ家來段介が、失ひたりしこの繪符が、どうしてこの家に。

ト思ひ入れ。この時、七郎助、門口の路地より出かゝつて窺ふ。

六三 それぞこれなる長兵衛が、持參のその繪符。

幸之 すりや、横死せし

トつか〳〵と寄つて、長兵衛の死骸を見て

さてこそ面體覺えある、頭は雪と變れども、正しく幼少の妹を連れ、逐電なしたる若黨長兵衛。

それを義理ある親といふ、おきぬが素性、合點がゆかぬ。もし幼少よりこれまで持ちし

きぬ 千葉妙見の掛け守、それに記せしわたしが幼名。

幸之 もしやお松と云はざるや。

きぬ エ。さう仰しやれば、コレ〳〵〳〵。

ト守の中より妙見の札を出し

「幼名まつ」と記せしお守。

ト幸之進へ渡す。

幸之 さてこそ親御の御手蹟、これを持つたるおきぬこそ、六歳の時家來長兵衛、誘拐したる妹のお松

きぬ そんならあなたは、誠の兄さん。

幸之 家名も片岡幸之進、知らぬ事とて其方は妹。

きぬ お前は兄樣。

幸之　思ひがけなう
きぬ　變つた所で
幸之　同胞名乘り
兩人　合ひましたなァ。
六三　すりや、おきぬが爲には、あなたは實の兄御樣。只心得ぬは、この短刀、どうして爰に。
　　ト此の時七郎助、これを聞いて
七郎　そんなら先刻安錢で、鉈の代りに買つたのが、アノ天國の短刀であつたか。
　　ト駈けよる。
幸之　その品、これへ。
六三　ハッ。
　　ト幸之進へ渡す。よく〳〵見て
幸之　ヤ、、疑ひもなき天國の、短刀尋ね出せしも、六三が手柄。其方、老母を同道いたして
　　ト六三へ渡す。この前に、おかや出かゝりゐて
きぬ　嬉しやそれで、阿母樣も

かや　短刀戻れば稻野谷の、家の榮えも六三が働らき。その上おはんも存命と
きぬ　嘆きの中のお喜び、それをあの世へ土產にて、あなたのお手柄。
　　ト兩手を廻す。
幸之　健氣な妹。
　　ト捕り縄たぐつて立ちかゝる。おかや、おその縋つて
かや　女に稀れなおきぬどの
その　科人にして、どうマアこの縄
きぬ　イヽャわたしはまだ外に、身に重なりし罪科に、縄かゝるのはかねての覺悟。必ず賴むはおはん
　さま。
その　そんなら妹の、おはんが行くへも
きぬ　賴み置いたは男氣な、七郎助どの、詳しう云うて。
　　ト思ひ入れあつて
　さはさりながらおそのさん、六三女房と彫り物の、消すに消されぬ入れ黑子、めでたう夫婦に
　　トほろりとする。この前より路地口に幸左衞門、市助、權九郎、出かゝり、窺ひ居て、この時

幸左　身共を偽るその女。人殺しなら

トつか〳〵と入り、おきぬへかゝる。幸之進支へる。おきぬは拾ひし手紙を出し

きぬ　用金百兩奪ひ取れと、宛名は堤幸左衛門。

幸左　ヤ、それを。

ト寄るを幸之進引附ける。

權九　南無三、こいつは

ト向うへ駈け出す。此うち向うより段介出て來り、花道よき所にて行きあひ、兩人ちよつと立廻つて

押し戻し、門口へ來り、取つて引敷き

段介　用金奪ひしこの盜人、その賴み手は慥かにそれなる

ト立ちかゝる。幸左衞門、權九郎、逃げんとするを、七郎助は幸左衞門、段介は權九郎と立廻り。市助は短刀を取らうと立ちかゝる。六三立廻つて疊をあげる。幸左衞門、權九郎、市助、バラ〳〵と床の下へ落ちる。六三、手早く疊を敷き、上へ上がつて

六三　極樂落しが床の下、事納まつて二人が詮議。

幸之　自身の白狀、不便ながらも

六三　すりや、どうあつても

きぬ　お主や夫に代る身の、あの世の縁は六三どの。

ト思ひ入れ。

幸之　科人、捕つた。

ト早縄をかける。おかや、おその泣き落す。

段介　主人の妹御、せめて面を隱すは幸ひ

トもとの手拭を取つて、おきぬにかぶせる。

きぬ　嬉しうござんす。情で顏は晒さねど、晒しに染めた手拭の、仇なるもとの散らし書、散らさぬやうに、おそのさん。

そのそんならわたしに、お前の男を

六三　添はすおきぬが氣強くも、男を去つた去り狀の

きぬ　三下り半は、わたしが帶の

段介　そんならこれを

トおきぬが帶の間より、一札が添へたる件の金財布を取出す。

きぬ　ぬしへ渡して。
段介　ヤ、こりや失ひし百兩の
きぬ　鵜の目返しの覺えの財布。
六三　して、一札は。
ト開き見て
ヤ、こりやコレおそのが
その　年季證文。
かや　すりや、身代の百兩も
幸之　慥かに家來が失なひし
六三　屋敷のお金で身請けの納まり。
皆々　すりや、その金も
きぬ　拾うたながら其まゝに、訴へ出でぬは盜みも同然。
皆々　ヤ。
きぬ　この身一つに引請けて

幸之　依怙なき成敗。
段介　痛はしながら
ト繩を引き立て、おきぬを連れ、幸之進跡より附き、花道へかゝる。おきぬ、思ひ入れあつて
きぬ　おはんさんの形見の小袖、袖にせぬやう
六三　袖の切れたる
その　お前の小袖は。
ト件の着物を見せる。おきぬ、振り返つて
きぬ　それも形見と
六三　ヤ。
きぬ　回向して下さんせ。
ト時の鐘、唄になり、段介、幸之進、おその先へ立て、向うへ入る。四人殘つて跡見送り
六三　サア、この上は少つとも早う、短刀を阿母樣、お前の手からお屋敷へ。
かや　それも急げど娘のおはん、あの子の顏も
七郎　それも尤も、さりながら

かや　心の急くはこの短刀、折紙添へてお屋敷へ

ト短刀を取上げる

六三　併し下家の三人を、遁さぬやうに

ト疊を上げる。この前より幸左衞門、權九郎、市助。路地の方より這つて逃げ出る。幸左衞門は市助と囁き合ひ、幸左衞門は向うへ走り入る。六三、下家を見て南無三、詮議の殘つたあの侍ひ、下家を拔けて、程は行くまい。

七郎　ちつとも早く。

ト この時、門口の兩人、バラ〳〵と入り、おかやとおそのへかゝり

權九　その短刀を

市助　おそのは旦那へ

ト兩方よりかゝる。六三、兩人を引退け、立廻る。此うち權九郎、短刀を取つて向うへ走り入る。

六三　南無三。野郎め。

そのあと構はずと。

市助　われを。

トかゝる。おその、蒲團を市助にかぶせ、押へる。おかやは折紙を拾ひ、行燈へかざして見る。六三は一腰をぶツ込み、しやんと尻をからげる。此うち市助起上がつてかゝるを、七郎助支へ、屋體囃子になり、六三は向うへ入る。市助は、七郎助を振り拂つて、同じく向うへ追ひかけ入る。舞臺は皆々引ツ張りよろしく

幕引きつけると、直ぐに屋體囃子のツナギにて、引返し。

幕

第二番目大切

萬年橋初午祭の場

役名——片岡幸之進。山姥の權九郎。萬年橋の若い者、でんぼう傳四郎。同、小旦那寸太。同、惡玉善吉。大工、勘六。廻し男、市助。堤幸左衞門。大工、杣の六三郎。

本舞臺、三間の間、萬年橋、柾木稲荷初午の體。幟、地口行燈、提灯、花やかに飾りつけ、爰に幸左衞門、市助、勘六、權九郎、傳四郎、寸太、善吉、いづれも六三が持つたる短刀に手をかけ、引組んで居る見得。屋體囃子にて幕明く。

ト皆々立廻りあつて、「ドツコイ」ととまる。

六三　こりやァうぬら、この短刀をなんとする。
幸左　知れた事だワ。おそのが戀の意趣晴らし、その短刀を奪ひ取つて
市助　旦那の手からお屋敷へ、あげてしまへば稲野谷の
勘六　家を絶やすがまだしもの、腹癒せなりと仰しやるゆゑ
權九　引ッ浚つたる天國を、此方へ渡せばその通り
傳四　四の五と吐かせば賴まれた、おいらが寄つて幸ひな
寸太　萬年橋からどんぶりと、直ぐに水葬、川流れ。
善吉　おいらに短刀、六三、キリ〳〵
皆々　渡せエ〻。
六三　幸左衞門に賴まれて、立前取りのがらくためら。邪魔をひろげば片ッ端、折も幸ひ初午の、柾木
權九　稲荷の神いさめ、劍の舞を始めるが、キリ〳〵爰を退くまいか。
皆々　寄つてたかつて總がゝり、六三をゞめろ。
合點だ。

ト六三にかゝり、立廻りよろしく、これより祇園囃子、初午の鳴り物なかり、短刀を枷に大タテよろ

しく存分にあつて、トゞ六三の手へ短刀結まる。この時、後より幸之進、ツカ〳〵と出て
幸之　六三、短刀は手に入つたか。
六三　氣遣ひなさるな、手に入りました。してアノおきぬは。
幸之　御吟味濟んで別條なく、命も助かり、お褒めのお詞。
六三　すりや、女房は……エ〻、忝い、
幸左　それを。
トかゝるな、六三、キッと引敷き
六三　動きやァがるな。
トちよつとあつて
まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

敲討櫓太鼓

かたきうちやぐらのたいこ

敵討櫓太鼓

序幕

瀬戸明神の場
島川太平内の場

役名――島川太平。磯貝藤助。源次兵衛娘、お雪。安森腰元、おさご。鷲の首太左衛門。安森下部、豆助。菊坂小源次。神職、榊左膳。遠山官藏。關口五平太。下部、權平。中間、角内。山の内の奥方、千草の前。海老名軍藏。安森源次兵衛。磯貝實右衛門。磯貝下部、友平。

本舞臺、向う一面の淺黄幕、石の玉垣、石の鳥居、これに瀬戸明神と記せし額を掛け、所々に石燈籠毛氈を掛けし長床几を並べ、爰に左膳、烏帽子裝束、神主にて、床几にかゝり居る。側に菖蒲革の中間二人、六尺棒を持ち、立ちかゝり居る。すべて瀬戸明神社内の體。よき所に松の立ち樹、日覆より同じく吊り枝。大拍子にて幕明く

中間　今日當社に於て、天下泰平の御祈念とあつて、卽ち安達家の御名代、海老名軍藏さま

同　まつた、山の内家の奥方様、御參詣でござりまする。

左膳　非常を糺す辻がため。最早お入りに間もあるまい。よろしく警固いたされよ。

トこの時、向うにて

五平　怪しからぬ早え足だ。姐え達、待つて下さい。

ト大拍子になり、お雪、振り袖。おさご、腰元の拵らへ。豆助、中間の拵らへ。跡より五平太、浪人の拵らへ、五合徳利を提げ、醉うたる體にて出て來り

これサ〳〵、先刻から呼ぶに、知らぬ顔をするとは曲がない。話しがある。待つて下せえ〳〵。

ゆき　これは〳〵、ついぞお目にかゝらぬお方ゆゑ、此方の事ではないと存じました。私しどもに何御用。お前、よいやうに御挨拶を、

さご　見受けますればお武家様さうなが、私しどもは今日、明神様へ參詣いたすもの。

豆助　何の話しか知りませぬが、立ちながらお話しもならぬ。お孃様にも、マアあれへ。

五平　イカサマ、當つて碎けろ、男は氣で持てといふから

さご　あれへ參つて、お話しを承りませう。

豆助　サア、お出でなされまし。

ト四人舞臺へ來る。左膳、お雪を見て

左膳　安森源次兵衛さまの御息女お雪さま、ようこそ御參詣なされました。

ゆき　今日は御兩家様の御參詣ゆゑ

さご　あなた様にも、御心配でござりませうな。

豆助　モシ、お侍ひ様、お孃様に、何やら御用があるではござりませぬか。

五平　用といふは外でもない。モシ、お雪さん……ア、、いゝ御器量だなア。それゆゑ、友達の島川太平が、お前を女房に持ちたいといふから、仲人をしてやらうと請合つて來た。サア、おれと一緒に來てもらはう。

さご　これは又滅相な、壁に馬乘りかけたやうな。

豆助　藪から棒といはうか

ゆき　どうしてマア其やうな事が

五平　ならぬと云へば、おれも武士が立たぬ。末のところはどうなりと、足入ればかりを

ゆき　それぢやというて、

五平　ハテ、悪い事は申さぬ。ちよつと身共とお出でなされい。
　　ト手を取る。左膳出て
左膳　これはどうでござる。すべて縁談なぞと申すものは、一朝一夕にゆくものではござらぬ。
五平　なんだ、神主の知つた事ではござらぬ、すッ込んで居やれ……サア、お雪どの、是非とも一緒
　　に。
さご　ア、コレ、滅相な事をすると免さぬぞ。
五平　エ、、邪魔をせずと、そこ退きやれ。
豆助　うぬ、狼藉な。何とする。
五平　何を此奴が。
　　ト豆助を殴りとばす。
豆助　もう料簡が
　　ト両人へ立ちかゝらうとする所を
中間　鎭まらぬか〳〵。
左膳　これはしたり、待たつしやい〳〵。

　　ト三人、五平太を支へる。お雪、おさご、ちよつと小隱れする。
五平　ヤア、肝腎の玉を逃がしちやァ
豆助　うぬ、侍ひめ、待ちやァがれ。
五平　何を此奴が。
　　ト両人よろしく立廻る。中間、制して
中間　何に致せ、今にお入りだ。鎭まれ〳〵。
　　ト支へながら下手へ爭ひ入る。お雪おさご、窺ひ出て
ゆき　ほんにマア、無理と云はうか、狼藉と云はうか、思ひがけない今の侍ひ。
さご　あれも大方、太平どのゝ、指圖でござりませうわいなア。
ゆき　それはさうと、奥様の御參詣とあれば、藤助さまも、お出でがあらうわいな。
さご　それ〳〵、日頃から御執心なされまする磯貝さまの若旦那、もうお見えなされさうなものぢやな
　　ア……アレ〳〵、噂をすれば影とやら、向うへござるは藤助さま。オゝイ〳〵。
　　ト三味線入り大拍子になり、向うより藤助、前髪かつら、麻上下、大小にて、跡より中間附いて、直
　　ぐに舞臺へ來り、両人を見て

藤助　安森源次兵衛どのゝ御息女、お雪どの、そもじにも御参詣でござるか。

ゆき　ハイ、私しは、殿様の御代参にて、只今明神様へ。

さご　左様ならあなたは、奥様のお供ではござりませぬか。

藤助　拙者ことはお先へ参り、萬事の手番ひ。殊には、奥方には當社へ奉納の金子五十兩、某へ仰せつけられしゆゑ、コレこの如く、持参仕つて別當方へ。

さご　お役目御苦勞に存じまする。あなたの御用相濟み次第……ナア、お雪さま。

ゆき　サア、わたしはさう思うて居るけれと、どうやらあなたは

さご　申し、藤助さま、ちとあなたにも粋になられて、お雪さまのお側へ。

藤助　アヽ、これはしたり、男女七歳にして席を同じうせぬ本文。

さご　其やうな堅い事ばかり仰しやりまするとあなたを別當所へやりは致しませぬ。この奉納のお金も、私しが預かりまして

ト件の金を取る。

藤助　アヽコレ、それは大事の品、此方へ戻して下されい。

さご　これが欲しいと仰しやるなら、もつと此方へお寄りなされませ。

藤助　其やうな事を申さずと、早うその品を

ト藤助取る。兩人爭ひよろしく、この時、後より權平、中間の拵ちへにて、この中へ入り、財布を引つたくり、行きにかゝる。藤助、惚りして支へる。權平、皆々を突きのけ、一散に向うへ入る。

藤助　ヤヽ、大切なる御奉納の金子を

ゆき　思ひがけない、何者やら

藤助　おのれ曲者、遠くは行くまい。跡追ひかけて。ソレ

ト大拍子になり、藤助、花道へ行きかける。向うより太平、袴羽織、大小にて、件の財布を持ち、權平を引ッ立て來る。これを見て

ヤヽ、おてまへは島川太平との。その者は只今、御奉納の五十兩を、奪ひ取つたる曲者。ようこそ捕へて下さりました。

太平　拙者只今これへ來かゝる折から、見れば下郎が財布を持つて、駈け來るゆゑ怪しく存じ、引ッ捕へてござる。

ト權平を見て

ヤア、おのれはいつぞや取逃げ致した

藤助　其やうな事を申さずと、早うその品を

ト藤助取る。兩人爭ひよろしく、この時、後より權平、中間の拵らへにて、この中へ入り、財布を引つたくり、行きにかゝる。藤助、惘りして支へる。權平、皆々を突きのけ、一散に向うへ入る。

藤助　ヤヽ、大切なる御奉納の金子を

ゆき　思ひがけない、何者やら

藤助　おのれ曲者、遠くは行くまい。跡追ひかけて。ソレ

ト大拍子になり、藤助、花道へ行きかける。向うより太平、袴羽織、大小にて、件の財布を持ち、權平を引ッ立て來る。これを見て

ヤヽ、おてまへは島川太平との。その者は只今、御奉納の五十兩を、奪ひ取つたる曲者。ようこそ捕へて下さりました。

太平　拙者只今これへ來かゝる折から、見れば下郎が財布を持つて、駈け來るゆゑ怪しく存じ、引ッ捕へてござる。

ト權平を見て

ヤア、おのれはいつぞや取逃げ致した

權平　南無三。それ知られたら

ト振り切つて逃げて入る。太平、思ひ入れあつて

太平　詮議のあるあの曲者、取逃がしては

ト行きにかゝる。

藤助　ア、イヤ、金子さへ取戻せば、申し分はございませぬ。おてまへ樣の御立腹も、拙者へお預け下されい。

太平　その御挨拶なくば、一詮議と存ぜしに、命冥加な下郎め……何は兎もあれ、右の金子、お受取り下されい。

ト財布のまゝ金を渡す。

藤助　御深切の段、忝う存ずる。金子は慥かに受取りました。お禮は重ねて。

太平　なんの〳〵、餘人は格別、其許の御親父實右衞門どのには、お世話にあづかる某。決して〳〵、そのお心遣ひは御無用でござる。

ゆき　太平さまには、ようこそ御參詣なされました。

太平　源次兵衞どの、御息女お雪どの、さて〳〵毎度ながら美しい……すりや、最前から藤助どのも、

この所にお居やつたか。

さご　左樣でござりまする。

太平　ハテ、それはお羨やましい。

兩人　エ。

太平　イヤサ、お羨やましいは各々方。御主人に仕へて、何不足の無いお身の上。それに引替へ身共は見る影も無い素浪人の身分。貴公方と同席いたすも、氣の毒に存ずる。

さご　これは〳〵、卑下なさるゝも事に依りまする。御浪々なされても、鎌倉の御直參、今にも御歸參なさるれば、元のお歴々樣。

藤助　何は兎もあれ、御氣鬱を散じる爲、別當方にて御酒一献。

太平　イカサマ、それも一しほ。然らば、お雪どのにも共々に

ゆき　有り難う存じまする。私しどもはお跡より。

藤助　左樣ござらば太平どの。

太平　磯貝氏、イザ、御同道。

ト三味線入り大拍子になり、藤助太平、下座へ入る。お雪おさご殘る。右の鳴り物にて、向うより千

草の前、襠袴衣裳。奥方の拵らへ。軍藏、實右衞門、麻上下、老けたる拵らへ、大小にて、源次兵衞上下大小。跡より絹羽織の若黨二人。跡より友平、下部の拵らへにて附きそひ、出てくる。此うち下手より左膳、神酒徳利と土器を持ち出てくる。舞臺の皆々も、よろしく出迎ひ

左膳　當社明神にて御祈念とござつて、山の内家の奥方様。安達家の御名代として

ゆき　海老名の軍藏さま

さご　遠路の御參詣

三人　御苦勞千萬に存じまする。

千草　神職はじめ其方達、出迎ひ大儀。自らも喜ばしう思ふわいなう。

軍藏　拙者とても殿の名代、今日一日の安達盛長、山の内とは相役にて、即ち兩家は當五月

實右　賴朝公、富士の御狩の節、お留守を守護なすその折柄

源次　西に當つて怪しき星は、只事ならぬと度々の訴へ。

千草　それゆゑ當社へ祈願を籠め、今日滿願の事なれば、神慮をすゝしめ奉らん。何は兎もあれ神前へ

軍藏　然らば奥方。

千草　皆も一緒に

皆々　まづ、入らせられませう。

トこの人數皆々舞臺へ來り、千草の前、軍藏、床几へかゝり、外の人數よろしく居並ぶ。

ゆき　御祈念の滿願とあつて、奥様はじめ軍藏さまにも、今日の御參詣、御苦勞に存じまする。

さご　友平どの、お前もよう來て下さんしたなア。ちやつと爰へ來て、顔を見せて下さんせいなア。

友平　アゝコレ。

ト目顏で知らせる思ひ入れ。源次兵衞、實右衞門、ちよつと見て、こなし。

さご　それぢやというて、わたしやお前に

源次　これはしたり、奥様の御前、扣へ居らう……恐れながら、奥様へ申し上げまする。當社は武運を守護の御神なれば、猶も御祈念あつて、然るべう存じまする。

千草　いかにも其方が申す通り、この度、劍術に達したる者を召抱へたるも、この明神のお引合せでがなあらうわいなう。

軍藏　拙者主人安達家にても、懇望ある劍術の奥儀、神妙劍の一卷、所持なしたる神道流の達人、元は奥州の浪人、尾花六郎右衞門どのを、山の内家にて召抱へられしとの事。いよ／＼おてまへ、神妙劍の一卷、御所持でござるか。

實右　その一卷は、拙者奥州に在りし時、同姓吉三郎と申す者、十四歳の時、同家中の怪に手疵を負はせしゆゑ、屋敷は追放、その砌り、彼の一卷を持參なし、家出いたしてござるが、數へて見れば十三年以前。

友平　左樣ござれば、弟御の藤助さま、お五つの時と見えます。今日にも御兄弟がお逢ひなされても、御存じはござりますまい。

實右　併しながら、左樣の事の前兆にや、某し祕藏に致したる、鶉の目貫の片々、それを包みし袱紗には、一首の上の句、「父戀し、片々目貫の啼き鶉」また弟の方へも片々の目貫、それに添へたる下の句は、「あはれ啼く子を耳上げて見よ」と、この上下の歌、連續する時は、我が子の兄弟。

千草　すりや、吉三郎は、世にも稀れなるその一卷を

友平　神妙劍を所持なさるゝお方が、吉三郎さまでござりまするか。

實右　いかにも。

ゆき　左樣なれば、藤助さまにも、御兄弟がござりまするか。どのやうなお方やら

さご　どうぞお見上げ申したいものでござりまする。定めて藤助さまの御兄弟なら、よい御器量でござりませうわいなア。

左膳　ハツ、憚りながら、お毒味の上、神前の神酒、御頂戴あられませう。

千草　後刻參拜の上、其方達も頂戴いたしてよからう。

源次　ハツ、お流れ下さりまするとや。

皆々　有り難う存じまする。

ト大拍子になり、向うより町人二人、戸板へ、血に染みたる權平の死骸を載せ、跡より角内、町人の形にて、しを〳〵と出て來り

町人　ハイ〳〵、お願ひでござりまする〳〵。

ト死骸をよき所へ直す。友平見て

友平　ヤイ〳〵、薄穢ない死骸といひ、奥方の御前。下がれ〳〵、下がり居らう。

角内　ハイ〳〵、お願ひさまでござります。

町人　コレ〳〵、兄貴、お願ひ申して、片付いたら又來ませう。

同　それまで、この境内に待つて居るぞや。サア、來やれ〳〵。

ト二人は入る。

千草　何やら町人體の者の願ひ。聞き屆けて遣はせ。

源次　ハッ。コリヤ町人、有り難い奥様の御意。して、其方が願ひとは。

角内　ハイ〳〵、別の儀でもござりませぬ。この死骸は、私しの弟でござりまするが、夜前、雪の下の裏道に、殺されて居りましたゆゑ、早速参つて見ますれば、死骸の側に落ちて居りましたはこの文。宛名は「藤助さままゐる、雪より」とござりますれば、人殺しの證據。この人殺しは、源次兵衛さまのお娘御、お雪さまとの事。私しも、たつた一人の弟でござります。どうぞ下手人を取つて下さりませ。お願ひでござります〳〵。

皆々　ヤヽ、何と申す。死骸の側にその文が

軍藏　落ちてあつたと申すからは、人殺しは、あのお雪どのとや。ハテナア。

源次　コリヤ〳〵、娘、打捨て置かれぬ只今の訴へ。其方、覺えがあるか。早う申せ〳〵。

ゆき　なんのマア私しが、左様な覺えは

さご　殊に夜前はお雪さまは、お宅にお出でなされたもの。

源次　でも證據あつての願ひとあれば、此まゝにも相濟まぬ。何は兎もあれ、その文、これへ。

角内　イヤ〳〵、大事の證據、滅多には渡されませぬ。

友平　それでは、いつまでも水掛け論。何しろその文を

ト引ッたくり

サ、お雪さま、お前様の御手蹟でござりまするか。

ゆき　なんのマア、覺えもないこの文。わしが手蹟ではないわいなう。

友平　アノ、これが。

ト思ひ入れ。

さご　似た名は世間にいくらもある。外を詮議なさんせいの。

角内　でも、「藤助さままゐる、雪より」とあるからは、實右衛門さまの御子息、磯貝藤助さま。そんなら一つ屋敷のお雪さま、二人が乳繰つてゐるを見附けられ、藤助さまと二人して、わしが弟を殺したに違ひござりませぬ。

ゆき　どうしてマア其やうな

角内　所詮四の五と面倒だ。この女を代官所へ

ト お雪を引ッ立てようとする。よき時分より太平、出かゝりゐて、この時、ツカ〳〵と出て、角内を見事に投げ、お雪を圍ひ

太平　最前より窺ひしところ、理非辨まへぬ素町人、殊には奥方の御前といひ、慮外いたさば免さぬぞ

角内　アイタ、、、、。お侍ひ様、わしを爰へ投げ出したは、貴様も人殺しの肩を持つか。
太平　身は島川太平と申す者。最前より窺ふところ、謀書に等しき證據を以て、これなる婦人を人殺しとの訴へ。さりながら、文にあり〳〵二人の名前あるゆゑに、血で血を洗ふ親々の心を察し、及ばずながら身共が引取り、聞き届けてくれうが、いよ〳〵このお雪どのが、其方の弟を、殺害いたしたと申すか。
角内　左様でござりまする。
太平　して、その場所は。
角内　極樂寺の切通しで。
太平　黙れ此奴。最前は雪の下の裏道と申し、今また極樂寺の切通しとは、詞揃はぬおのれが訴へ。
角内　サ、それは。
太平　何は兎もあれ、死骸をとくと改めた上
　ト死骸を、よく〳〵見て
　ヤ、こりやコレ以前勤めし身が家來、我が方を取逃げ致せしに、又ぞろ最前御奉納金を、奪はんとせし重罪人。

皆々　ヤ、なんと。
太平　未だどうやら息ある様子。斯様な奴を生け置く時は、後日の爲によろしからず。いつそ身共が、この世の暇。
　ト立ちかゝる。
角内　モシ、それはあんまり。
太平　下郎め、觀念。
　ト權平を刺し殺しにかゝる。
權平　ヤア、こいつは堪らぬ。
　ト兩人駈け出さうとする。友平は權平を、太平は角内を引附ける。この時、權平、懐より手紙の入つたる紙袋入れを落す。
友平　おのれ、何者に頼まれて、斯様な事を致した。
太平　眞直に申さばよし、さもなくは眞二つに。
角内　アヽ、申します〳〵。誰れも頼みは致しませぬが、金が欲しさの出來心。
權平　それゆゑ斯様に死人の眞似事。

角内　これより外に、申す事はござりませぬ。
兩人　御免なされまし〳〵。
友平　よく吐かした。その代りに
太平　生け置いては捉が立たぬ。
友平　いつその事に。
千草　ソレ、留めい。
實右　扣へ召され。
友太　でも、この者は。
實右　ハテ、奥方の御意でござる。
友平　ハッ。
ト扣へる。
千草　慈悲は上にありと申し、殊に社内の庭先なれば、神慮の恐れ、兩人ともに、助命いたしてやりや
れ。
源次　ハヽッ、誠に御仁心あるお計らひ。流石は大國の奥方様。

太平　有り難きそのお詞。然らば此まゝ
友平　命冥加な二人の奴等。
兩人　とく〳〵爰を立去り居らう。
ト突き放す。兩人起上がり
太平　誰そこの者どもを追ひ拂へ。
中間　ハッ。立ちませい。
トこれにて花道へ行く。
角内　併し、此まゝでも歸れまい。
權平　古いやつたが、狂歌でも云はうか。
角内　斯うもあらうか。「十藏の科ゆゑ今は門三から、阿房拂ひのゞめ高を
權平　冠十するは明日の淺友」
角内　なんだか字數が多いでねえか。
中間　立ちませい。
ト時の太鼓になり、兩人向うへ入る。大拍子になり、友平、件の文の入つたる莨入れを開いて、中の

文言を、よく〳〵見て、思ひ入れあつて懐中する。皆々これを知らず

さご　モシ〳〵、お雪さま、危ない所へあなたがござつて、事なう濟みました。ちやつとお禮を仰しやりませ。

ゆき　心にも無き事ながら、ほんに當惑いたしました。親どもが計らひにも、如何と思ふその所へ

源次　こなたがござつて、娘を一人拾ひました。

軍藏　何事も拔け目なき島川氏。これと申すも、根が發明ゆゑ、劍術は實右衛門どのゝ御門弟、拙者とは從兄弟同士ゆゑ、斯樣に申すは如何なれど、一器量ある太平どの、さるによつて、お雪どのを宿の妻にと、度々申し入れても御承知ござらぬが、今日は殿の名代たるこの軍藏、お仲人いたさう。

友平　エヽ、なんと仰しやります。このお雪さまを、太平さまの御新造樣にでござりまするか。ハテ、怪しからぬ提灯に釣鐘。

軍藏　ヤ。

友平　イエサ、釣合ひのよい御夫婦、こりや御相談が出來ませう。

太平　たとへ相談が調ひましても、源次兵衛どのは山の内家のお旗々。拙者は當時浪人。大切なるお娘

御を、何を見當てに私しへ

軍藏　ハテサテ、卑下なさるも事による。今でこそその身分なれども、歸參いたさば天下の諸侯、それを聟にさつしやるは、源次兵衛どのと申し、お雪どのはあやかり者。平に拙者がお仲人。

源次　思し召しは忝うござれども、不束なる娘、やう〳〵當年十五歳、まだ子供でござりまする。その上、此方は陪臣者でござれば、牛は牛連れとやら、天下の御直參に、拙者望みはえゝござらぬ

軍藏　でも、折角の儀なれば、是非とも御返事が承りたい。

ゆき　申し、父さん、どうぞその事ばかりは

源次　オヽサ、其方が申す通り、この儀ばかりは

軍藏　これサ〳〵、御兩所、なぜ返事が成りませぬ。

源次　サア、それは。

軍藏　浪人の太平どのゆゑ御不承知か。

源次　全く以て。

軍藏　アヽ、そんなら仲人が氣に入らぬか。

源次　どう仕つて。

軍藏　然らば返事を。
源次　サア、それは。
三人　サア〳〵〳〵。
千草　コリヤ〳〵、爭ひ無用。源次兵衞、其方が娘雪には、云ひ號けがあるではないか。
源次　な、なんと御意遊ばしまする。
千草　外に云ひ號けあるに、率爾に緣談は成るまいぞや。
　　ト呑み込ます。
源次　成る程〳〵、娘には、云ひ約束の男がござる。
軍藏　して、その男は、何者でござる。
源次　サア、その男と申すは……オヽ、それ〳〵、これにござる實右衞門さまの御子息、藤助どのでござる。
　　トこなし。お雪おさご喜ぶ思ひ入れ。實右衞門、悔りして
實右　これは如何、何を仰せらるゝ。
源次　ハテサテ、娘雪は、實右衞門さまの御子息藤助どのと……サア、年も似合ひの好い女夫と、サ、親

と親とが番うた詞。なんであらうと、かゝる手詰めの、ナ、今さらよもや違背もあるまい。二人の者は云ひ號け……云ひ號けでござる。
　　ト思ひ入れ。實右衞門、呑みこみ、こなし。
實右　いかにも悴藤助と、これなるお雪どのと、云ひ號けに相違ござらぬ。
軍藏　すりや、いよ〳〵
源次　左樣でござる。
軍藏　ハテ、變つた仕組みの云ひ號け。これと申すも、奥方の御贔屓から
千草　ヤ。
軍藏　イヤサ、贔屓に思ふ太平どのゆゑ、折角お取持ち致さうと存じたが、お聞きの通りなれば、何とも以て氣の毒千萬。
太平　御深切忝うござれども、外に云ひ約束とござれば、近頃殘念に存じまする。
千草　この上は、最早妨げなきうちに、幸ひ今日は日柄も好し、藤助を呼び出し、この所に於て、祝言のまねびを
源次　藤助どのにも一通り、申し聞かしてようござりませう。

實右　悴は居らぬか。藤助々々。

ト奥にて

藤助　ハッ〳〵、畏まりました。只今それへ。

ト大拍子になり、奥より藤助出で來り

奥様はじめいづれも様、お早い御參詣。私しもお先へ參り、お待受けに何かの用意。して、火急のお召しは、御用でござりまするかな。

實右　その用と申すは別儀でない。只今奥方のお指圖にて、これなるお雪どのと其方、婚姻の取結び致せよとの御意。親々の云ひ約束ゆゑ、當人ども存じ居らぬも理り。御意もだし難く、右の御請け致してよからう。

藤助　これは〳〵、御主君の御意と申し、あなたの思し召し、有り難う存じますれど、私しには本郷八百屋の娘、お七とやら、未だ互ひに顔は存じませぬど、私しとは云ひ號けではござりませぬか。

實右　サア、ムウ、いかにも、そのお七ことは、町人の娘なれども、以前は武士の胤ゆゑ、云ひ約束は致したなれど、その親たる久兵衛も病死との事。繼母は心よからぬ者にて、なか〳〵我れ〳〵には縁附くる所存なし。御大家様へ妾奉公にも差出す存念にて、母親より斷わりなれば、このお雪

どのを、某し疾より申し請け置きたれば、その心遣ひ、必ずともに。

藤助　違背ならざるこの場の仕儀。

實源　そんなら二人は得心なるか。

藤助　ハヽッ、この上ともに

ゆき　御前よしなに。

千草　年も似合ひの好い夫婦……オヽ、めでたい〳〵。

左膳　恐れながら、奥方様へ申し上げまする、最早祈念の刻限、神前へお入りあつて、然るべう存じまする。

千草　最前より、思はぬ事にて餘程の遲刻。

實右　悴藤助、當社へ寄附の金子五十兩、奉納いたしてよからう。

藤助　畏まりました。左様ござらば神職方へ、相渡すでござりませう。

ト最前の財布を出し、金を見て悔り。軍藏、太平、見てこなし。

軍藏　最早神拜の刻限なれば、兩家よりの奉納金を

藤助　サア、その金子は

皆々　如何いたした。

藤助　今朝お納戸より受取りましたる節は、金子でござりましたが、只今見ますれば、似ても似つかぬ石瓦。

皆々　ヤヽ、なんと。

實右　コリヤヤイ、奉納金に凶事あつては相濟まぬ。して〳〵、その樣子は〳〵。

藤助　サア、最前これへ參りしところ、何者とも知れず、奪ひ取つて駈け出せしを、あれなる太平どのが、折よく取戻しくれられたゆゑ、直さま懷中いたし、只今見ますればこの通り。それより外に、人手に渡しましたる事はござりませぬが、どうも合點が。

太平　これサ、藤助どの、おてまへのやうに申さるゝと、手に觸れましたは、曲者と身共ばかり。何とも以て氣も毒千萬。畢竟其許の御油斷と申すもの。奪ひし金子、折よく手前取戻し、財布のまゝお渡し申したれば、中は石やら瓦やら、一向存ぜぬこの太平。それを手に觸れたるを、あのゝものゝと、おてまへには、異な事の申されやう。

藤助　成る程、御尤もなる仰せ。御覽の如くの當惑ゆゑ、思はぬ粗忽。眞平御免なされませい。

實右　おのれがうつそりから、斯くの仕合せ。それを何ぞや、人樣に兎や角申しては、太平どのゝ手前面目ない……ナニ、島川氏、悴が粗忽、御立腹の段、拙者に免じ、御容赦下されい。

太平　これは〳〵、御叮嚀なる御挨拶。兎角お若いには、斯樣な事はあるものでござる。ハチサテ、氣の毒千萬。

源次　今日よりは、智舅なれば、外ならぬ一大事。右の金子の行き道は。

藤助　サア、その金子は。

實右　此奴、その金子に遲疇あつては、其方ばかりか、身共が越度。一家一門逃れぬ罪科。この上は、切腹なして申し譯いたせ。

藤助　仰せにや及ぶ。南無阿彌陀佛。

友平　アイヤ若旦那、早まらつしやりますな。

藤助　イヽヤ、放せ。

友平　御尤もにはござれども、御切腹には及びませぬ。

藤助　でも、大切なる金子の紛失。

友平　イヤ、その金子は、ござりまする。

皆々　なんと。

友平　サア、その金子さへ出ましたら、御切腹には及びますまい。

トこなしあつて

モシ、島川さま、イヤサ、太平さま、ちよつとお目にかゝりたうござりまする。

太平　アノ、身共に。

ト大拍子、キツパリとして

して、その用とは。

友平　外でもない、出して下さい。

太平　そりや何を。

友平　れこしきを。

太平　ナニ、れこしきとは。

友平　其やうに白を切らつしやると、此方も白で云ひますぞや。

太平　白で云ふとは。

友平　ハテ、最前の悪者が落した、紙莨入れの中に、今日の體裁を頼みの一通。今の死骸の側に落ちてあつたこの文と、比べて見れば、正しく同筆。

ト以前の手紙を二通出して見せる。太平、恟りして

太平　ヤヽ。

友平　先刻の死人も、紛失の金も、皆この手紙の宛名の企み。それを云はぬも、事穏便にしたいばかり魚心ありやア水心。どうぞ術よく出して下さい。

太平　默れ、下郎。おのれのやうに申すと、どうやらその金を、身共が取つたやうに……これ見ろ、浪人こそ致せ、島川太平は侍ひだぞ。この大小が目にかゝらぬか。

友平　其やうに云はつしやるなら、この手紙、高々と讀みあげませうか。

太平　サア、それは。

友平　ところを讀まぬがこの場の花。ハテ、物には間違ひといふ事が間々あるもの。最前金を取返して下さる時、懐の内で、お前の御所持のこの品と、金が取替つて。

太平　イヤ〳〵、其やうな事は知らぬ。知らぬわい。

友平　知らぬとあれば、この手紙。

ト出しかけて見せる。

太平　アヽコレ、穏便々々。

友平　そんなら、間違ひにさつしやるか。
太平　仕方がない、間違ひだ〳〵。
友平　左樣なれば、懷をよく見せて下さい。
ト太平、金を出して
太平　成る程、こりやァ間違ひだ。身共、盆石に致さうと、求めて參つた石と、最前のドサクサに、思はず金子と取違へたと見える。ハテサテ、粗相千萬な。
友平　然らば、お大事の石をお返し申します。
太平　ソリヤ、金よ。
友平　ソリヤ、石よ。
ト取替へて
太平　役にも立たぬこの石のお庇で、エ、、いま〳〵しい。
ト打ちつける。
友平　物事無事に納まれば、有つて益なきこの書面。カウ〳〵。
ト引裂き捨てる。

これがほんの、石は石、金は金。
ト藤助へ渡す。
千草　事穩便の下部が計らひ、實右衛門、彼れは取上げ、召仕うてよからう。
實右　聊かの儀がお目にとまり、彼れが身にとり冥加至極。
友平　人數ならぬ下郎めへ、有り難き御諚、恐れ入り奉つてござりまする。
實右　太平どのは拙者劍術の門弟、浪人の事ゆゑ、不便を加へたれども、只今の仕儀、今日より手前方へお出では御無用。
太平　エ、。
ト悔り。
實右　恩を仇なるさま〳〵の惡事。穩便の御沙汰ゆゑ、何も申さぬ。ハテ、見下げ果てたる犬侍ひめが。
ト思ひ入れ。太平、無念のこなし。
軍藏　計らざる儀にて餘程の隙入り。
源次　御寄附の金子、恙なく戻りし上は、少しも早く神職方へ。

藤助　左様ござらば、イザお受取り下さりませう。

ト左膳の前へ出す。

左膳　ハッ、慥かに受納仕つてござりまする。

源次　奥方様にも、神職方へ。

軍藏　拙者も主人の代參なれば、イザ、御同道。

千草　然らば方々。

皆々　まづ、お入りあられませう。

ト唄になり、千草の前、軍藏、侍ひ附添ひ、上手へ入る。實右衛門、立たうとするを

太平　アイヤ、實右衛門どの、お待ちなされい。

實右　身共に用事が

太平　左様でござる。

實右　して、その用とは。

太平　外でもござらぬ、云はぬ事は罪とござるゆゑ、何もかも云つてしまひます。何を隱さう、相摺りを頼み、奉納金を横取りしようと思つたら、まんまと首尾よくしくじつた。その上、おてまへに

は見放され、安森源次兵衛が高祿を見込み、聟にならうと思つた、お雪の緣談は脇へ極まり、つまらぬ者はこの太平……イヤ、磯貝氏、是非所望させておくりやれ。

實右　そりや何を。

太平　この下部を。

實右　イヽヤならぬ。おてまへのやうな畜生侍ひに、忠臣者のこの下郎は遣はされぬ。いつまでも身の家來。

太平　なんと。

實右　して、この者を御身に遣はせば、なんと致す。

太平　ハテ知れた事、滿座の中で面恥かゝせたこの下郎、身共が貰うて存分に致す。

ト これにて友平こなしあつて

友平　ア、モシ〳〵、私しも大事を思ふ旦那方の御難儀ゆゑ、思はず手に入つたあの手紙、よく〳〵見たら今の仕儀、それゆゑウカ〳〵と申し、あなたの邪魔を致しました。どうぞ御免なされて下さりまし。

太平　イヽヤならぬ、武士に面目を失はせた奴。うぬ、眞二つにする。

藤助　サヽ、御立腹は御尤もではござれども、見るかげもない下郎が身の上。ゆきこの儀は幾重にも、お免しなされて下さりませ。

太平　イヽヤならぬ。おのれをぶッ放し、跡で身供も切腹いたす分の事。

友平　すりや、いか程お詫び致して

太平　叶はぬ事だワ。

友平　ハテ、是非に及ばぬ。

ト思ひ入れあつて實右衛門に向ひ

旦那様、私しにお暇を下さりませ。

實右　そりや又何ゆゑ。

友平　お聞きの通り、お詫び申しても、御承知なされぬ太平さま。私しの粗忽より事起り、御主人方の御迷惑になりましては、却つて不忠。それゆゑ、私しの命は、あなたへ差上げまする。何卒お暇を下さりませ。一合取つても武士の家來、覺悟を極めて居りまする。

實右　ウム。尤もなる願ひ、いかにも暇を遣はさう。

友平　ハヽッ、有り難う存じまする。この上は、一本立ちのこの下郎。サ、太平さま、御存分になされて下さりませ。

太平　好い覺悟だ。下郎め、觀念。

ト刀へ手を掛け、拔きかけ、竹光ゆゑ、ちやつと納めて思ひ入れ。

下郎めに刀は穢れ。サア、覺悟はよいか。

ト首筋を取つて、いろ〳〵思ひ入れあつて、ちよつと立廻る。友平、キッと留め

友平　ドッコイ、下郎も武士の端くれ。さうはゆきますまい。

太平　所を斯うして。

ト白嚏子になり、兩人立廻りになり、錆びたる脇差を拔きかける。刀の竹光を友平拔き取りて、キッと差しつける。皆々思ひ入れ。

友平　お嗜み、天晴れ名作。

太平　それを。

ト取りにかゝる。友平、持ちかへ、キッと見得。

友平　この竹光では奴は切れまい。イヤサ、豆腐でも覺束ない。あまり不埒なお侍ひ。中心は慥かに古鐵買ひに。

ト太平、ちやつと脇差を取り

太平　イヽヤ、研ぎに遣はした。四季に研ぐは武士の嗜み。差替へなき浪人ゆゑ、表ばかりのこの刀。

友平　剣術手練の島川さま、餘人が正宗帶せしより、これが天晴れあなたの魂ひ。莫耶が劍も持ち手とやら。ハテ、よい心掛けなア。

太平　おのれ、武士を嘲弄いたすな。

ト又脇差にて切つてかゝる。立廻つて、竹光を差しつける。太平、面白なき思ひ入れ。

友平　サア、これでも御料簡はなりませぬか。但しは、お相手になりませうか。

太平　アヽイヤ、それには及ばぬ。手の内見えた。下部に似合はぬ天晴れ愛い奴、赦してくれる。

友平　すりや、何事も此まゝに。

太平　いかにも。

友平　ハヽ、有り難う存じまする。左樣なれば、御免なされまし。

ト拔身を太平へ渡し

ヤレ〳〵嬉しや、危ふい命を拾ひました。これと申すも、明神樣のお庇、エヽ、忝い。

トこなし。實右衞門、思ひ入れあつて

實右　下部に似合はぬ今の手の内、天晴れ出かした……サ、この上は約來通り、元の主從。

友平　すりや、以前の如く御家來に、エヽ、有り難う存じまする。

太平　下郎が命、助け遣はすその代り、かねて望みの劍術の印可、申し請けたい。

實右　成る程、望みに任せ、遣はしたい、と申したらよからうが、罷り成らぬ。

太平　そりや又なぜ。

實右　其方の心に問うて見やれ。すべて畜生鳥類でも、三日飼へば尾を振ると、恩を知らぬおてまへ、畜生にも劣つてござる。未熟不鍛錬な手の内で、印可の望み、そりや成らぬ、よしにしやれ。

太平　すりや、身共が手の内不鍛錬ゆゑ、印可は罷り成らぬとな。

實右　いま十年も修行して、望み召されい。ヤレ、馬鹿々々しい。

太平　面白い。身共が手の内、未熟か、未熟でないか、いま爰で……ハテ、何をがな。

トあたりを見廻し、下手の松ケ枝に目を附け、錆びたる脇差にて切り、枝をひけらかし

なんと見たか、立ち樹の松をスッパリと、しかも左で、まッこの通り。眼があらば押ッ開いて、とつくりと、これを見よ。

實右　成る程、見事。

トこなしあつて上手の松を、白刃を抜き、背にて切り
刃物を以て木を切るは、庭造りの爲す業。いがみくねつた心より、こりや斜に切つてある。しかも刀目が入つてある。これを見よ。背打ちの手練。植木の蟲が植木を枯らすとは御身の事。左樣な末熟で、誠の人はえゝ切れまい。爰な大だはけめが。

太平　切れるか切れぬか、身が手の内を

ト切つてかゝるを、ちよつと立廻り、見事に當てる。太平、悶絶する。

皆々　これは。

實右　ハテ、粗相千萬な。ハヽヽヽヽヽ。

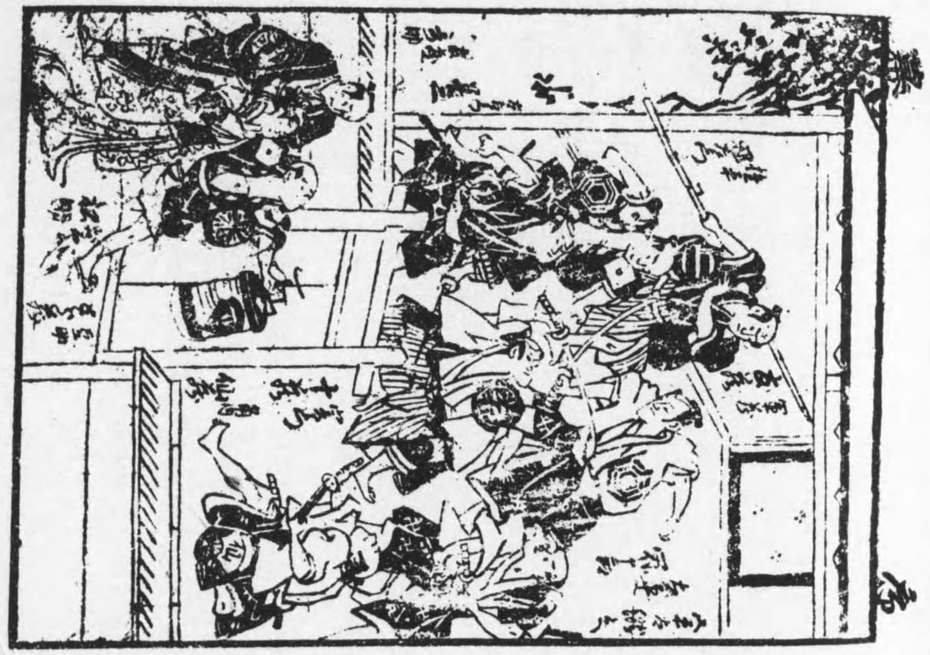
ゆき　舅御樣へ一つのお願ひ。

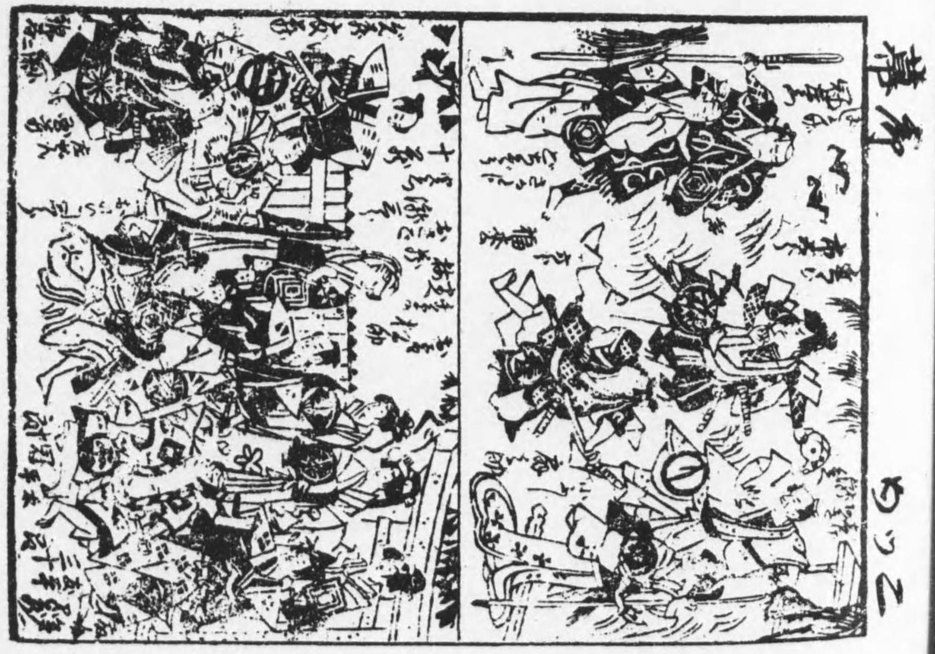
實右　ナニ、願ひとは、

藤助　只今の御褒美に、これなる友平と、おさごを、女夫になし下さらば

ゆき　有り難う存じまする。

實右　かね〳〵譯ある事は、ほのかに聞く。其方達が願ひの通り、夫婦に致しくれん。二人の者、嬉しいか。





さご　これが嬉しうなうて、なんと致しませう。

實右　斯樣な事は寸善尺魔、結ぶの神の鳥居先。幸ひ爰に神酒土器、時にとつての雌蝶雄蝶、花に嵐の吹かぬうち、この場に於て

四人　そんなら、私しども〻

實右　假の祝言、杯しやれ。サヽ、席を正して。

ト三味線入り大拍子になり、上の方に藤助お雪、下の方に友平おさご、眞中に實右衞門、左膳が盃いたる三方の神酒土器を取つて、祝言の杯事よろしく

千秋萬歲の千箱の玉を奉る。

四人　有り難う存じまする。

實右　杯濟みし上からは、跡に殘つて二女夫、めでたく爰で

四人　エヽ。

實右　仲人は宵の程、ドレ、開きませう。

ト唄になり、實右衞門、思ひ入れあつて下座へ入る。跡矢張り右の鳴り物にて、四人囁き合ひ、いろいろこなしあつて、藤助とお雪は上の方へ、友平とおさごは下の方へ入る。時の鐘。橋がゝりより五

平太、上手より軍藏、窺ひ居て、思ひ入れあつて、太平へ活を入れる。これにて心附き、兩人を見て
實右衞門を追ひかけて切らうと云ふこなしにて行きかける。

軍藏　島川氏、いづれへござる。

太平　知れた事、遺恨重なる實右衞門、奥へ踏ん込み眞二つに。

五平　成る程、最前よりの樣子では、腹の立つのも尤も。

軍藏　いま奥へ踏ん込み、仕負ふせたところが、狼藉者と召捕られ、犬死をしようより、いつその事に
……コレ

ト躍く。太平、呑み込み

太平　イカサマ、それは天晴れの手段、今日の意趣晴らし、彼奴に恥を與へたなれば

軍藏　是非ともそれでは破談になるワ。

太平　もし又それでゆかぬ時は

五平　親子ぐるめに

太平　おのれ磯貝

軍五　コレ。

太平　覺えてうせう。

ト早めたる大拍子になり、太平、一散に向うへ入る。軍藏五平太、下座へ入る。跡、三味線入り大拍子になり、藤助お雪、友平おさゝ、思ひ入れあつて出で來り、此うち豆助出て、手洗ひ水にて四人の手を清め

豆助　ヤア、旦那方ばかりと思つたら、こなた衆もお清めか。ハテ、今日は夥しい御參詣、お清めのお手水、お手水。

ト柄杓を持ちて思ひ入れ。

四人　何をお云やる。ハヽヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。大拍子になり、向うより官藏、絹羽織、若黨の形にて出て來り

官藏　ハッ、申し上げまする。私しは新參の若黨、遠山官藏と申す者、若殿千草之助さま、お雪どのを火急のお召し。片時も早くお屋敷へお上がりなされませうとの、御意でござります。

ゆき　そんなら私しを、アノ若殿樣が

藤助　お召しとあらば、ちつとも早う。

さゝ　お越し遊ばすなら、私しもお供を

ゆき　ア、イヤ〳〵、其方は殘つて、母様もろとも

豆助　そんならお供はこの奴。

ゆき　左様なれば私しは

三人　片時も早う。

ゆき　豆助、おぢや。

ト大拍子になり、お雪先に、官藏豆助附いて向うへ入る。下手より實右衛門出で來り

實右　其方達、これに居つたか。して、太平めは如何いたした。

友平　私しどもが、暫時休息いたし居るうち、いづくへか。

實右　人に面を合すが面目なきゆゑ、歸宅いたしたと見える……イヤ、歸宅と申せば、雪は居らぬか。

さご　ハイ、お雪さまは、只今若殿樣火急のお召しゆゑ、御殿へお上がりなされました。

實右　あの雪は、神妙なる生れつきゆゑ、若殿の御意に入り。源次兵衛夫婦には、ハテ、よい娘を持たれた……イヤ、それにつき友平、其方の親庄兵衛は、身が奥州に在りし時の家來、一年用事あつて、江戸表へ上りしところ、關屋の里とやらで、女子の捨子を拾ひ、おくまと名づけ養育せしとの事。その後出生なしたる其方と申し、姉とても我が方に奉公なし、若氣のいたづらにや、若黨

才三郎と不義密通、殊には懐姙との事ゆゑ、それと云はずに兩人とも、暇を遣はしたが、その才三郎は今にては、安達家へ在りつき、戸倉十内と改め、立身との事。して、姉のおくまは、如何いたした。

友平　ハッ、手前が姉のおくま事は、お暇下されて其まゝ、宿へ下がる間もなう、女子の子を産み落せしが、親庄兵衛は物堅き性質ゆゑ、あなたのお目を掠めては道立たずと、緣を切らせ、産み落したる子は才三郎の胤ゆゑ、里へ預けましたが、この里親とても、行くへが相知れませぬやうにございまする。

實右　ハテ、それは不便な事。年月數へて見れば、その産み落せしは、もう十五年。

友平　下郎の爲には實の姪、娘盛りでございませう。

實右　おくまは別れし才三郎へ貞女を立て、其方達三人兄弟のうち、一人の弟傳吉もろとも、住ひ致すではないか。

友平　左様でございまする。弟傳吉方に居りまするが、その日暮らしの身貧な者。併しながら、傳吉めは正直一遍な役に立たずゆゑ、姉一人をば過しかねまする。

實右　イヤ〳〵、左様申すな。親は泣き寄りとやら。身共が惣領の吉三郎めは、家の祕書、神妙劍の一

巻を所持なして、武術修行に家出を致したが、いづくの浦に暮らし居るやら、十三年の間音信なければ、心がゝり。

藤助　殊にはこの節、八丈小僧吉三といふ悪者、所々方々をあぶれ歩くとの事。

實右　もしやはそれが惣領の

友平　よもや兄御の

さご　吉三さまであらう筈もなし、

四人　ハテナア。

ト この時、奥にて

呼び　御歸館。

ト 火拍子になり、下座より千草の前、軍藏、源次兵衛、侍ひ附いて出てくる。皆々平伏する。

實右　これは〳〵奥方には、最早御歸館でござりまするか。

源次　安達家の御名代にも、終日御苦勞に存じまする。

軍藏　これは〳〵、安森源次兵衛どの、磯貝御親子とも、何かの心配。それにつき、只今あれにて承れば、おてまへの御子息吉三郎、神妙劍の一巻所持召され、家出との事。拙者主人も、一巻殊の外御懇望、今にてもその品、殿へ差上げる者には、五百石にて召抱へるとの事。その吉三郎どの、行くへ知れなば高祿にありつかうもの、ハテ、惜しい事なア。

ト 向うより足輕走り出て

足輕　ハツ、申し上げまする。我れ〳〵辻がため致せしところ、はるか向うへ砂煙を立て、早打ちの武士相見えまする。アレ〳〵、向うへ駈けつけました。

ト 云ひ捨て、引返して入る。直ぐに向うバタ〳〵にて、小源次、股引絆纏、鉢巻、大小、腰に鞭を差し、一散に出て來り

小源　ハツ、御注進々々。

軍藏　おてまへは戸倉十内の組下、菊坂小源次、火急の早打ち氣遣はしい。して〳〵、樣子は。

小源　されば、拙者は駿州よりの早打ち。富士の裾野に於て、二十八日の夜半頃、五月雨しきりに眞の闇、時節到來待ちうけし、曾我兄弟の者どもが、十八年の仇敵、祐經どのを討ち取つて、直ぐに御領の假屋へ切り入り十番斬り、されども天運盡きたるにや、兄祐成は仁田どの、まつた弟の時致は、五郎丸どの組みとめしが、その夜の仔細見屆けて、拙者直さまこの早打ち。殿の御安泰をお知らせ申さん爲、晝夜をいとはず、只今參着いたしてござる。

千草　さては曾我兄弟、年來の本望を達せしか。
小源　これより直さまお上屋敷へ。
皆々　片時も早う。
小源　心得ました。
ト引返して入る。皆々こなしあつて
實右　さてこそこの程二つの惡星
藤助　西に當るは富士の根方。
源次　その兄弟の孝心を、天も感應ましく〳〵て
藤助　討たしめ給ふか但し又
軍藏　世の動亂も計りがたし。
實右　この上は、鎌倉御所も固め申さん。
さご　奥方樣には直さま御歸館。
藤助　路次の警固は家來友平。
友平　お見送り仕るでござりませう。

千草　然らば此まゝ
皆々　イザ、お越しあられませう。
ト大拍子になり、千草の前、軍藏、源次兵衞、侍ひに友平附いて向うへ入る。實右衞門、藤助、おさご殘り、こなしあつて
藤助　打捨て置かれぬ狩場の樣子。
さご　富士の根方へ見舞ひの御使者。
實右　忰藤助、明朝未明に出立おしやれ。
藤助　畏まりましてござりまする。
トこの時、向うバタ〳〵になり、お雪、髪を亂し、解けかゝりし帶を抱へ、豆助、猿轡をかけられ、荒縄にて縛られたまゝ、走り出で來り
ゆき　モシ、口惜しうござります、口惜しうござりますわいなア。
藤助　ヤア、お雪といひ、下部が有樣。
さご　合點のゆかぬこの體は。
實右　何は兎もあれ、その縛しめ。

藤助　心得ました。

ト豆助の縄、手拭を取り

三人　して〳〵、様子は。

ゆき　最前若殿様のお召しとあるゆゑ、お屋敷への歸り道、朝比奈の切通しに、浪人體の者大勢、その中にアノ太平づらが打交り、わたしを捕へて無理無體。口惜しいわいなア。わたしやどうせう、どうせうぞいなア。

豆助　先刻迎ひに來た侍ひも、その中に居てわしを縛り、大勢でお雪さまを。

ゆき　申し、藤助さま、わたしや口惜しい、口惜しいわいなア。

實右　すりや、浪人が待伏せし

藤助　祝言すれば身が女房、そんなら其方をアノ太平が

ゆき　無理に捕へて……ハアヽ。

藤助　それで解つた。何も云ふな。ソレ

ト股立ち取つて、行かうとする。

實右　コリヤ、うろたへて、いづれへ參る。

藤助　あの太平めを。

實右　尤も至極。行く心なら留めはせぬが、そちや何ぞ忘れた物はないか。

藤助　なんと仰しやります。

實右　太平と勝負の場所へ、持參いたさねばならぬ品があらうがな。

藤助　ヤ。

實右　殊に勸めて持たせた女房、親子の仲でも義理がある。その品持つて身が行かうか。

藤助　御持參なさるゝその品とは。

ト實右衞門、思ひ入れあつて、お雪の顏をあげ

實右　そちや島川太平が恨めしいか。

ゆき　アイ、女子の道が立ちませぬ、

實右　オヽ、尤もぢや。命を捨てるは忰へ貞女、其方が敵は、身が取つて遣はすぞ。

ゆき　嬉しうござんす。

實右　ハテ、逢ふは別れの初めぢやなア……年頃立てぬく武士の意地、不便ながらも

ト刀を拔く。

藤助　とは云ふものゝ。
實右　家の恥辱にや更へられぬ。
藤助　ハッ。
實右　南無阿彌陀佛。
　　ト刀を振りあげ、ホロリと思ひ入れ。この仕組みよろしく、知らせにつき、時の鐘の送りになり、この道具ぶん廻す。

（作者　重扇助）

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面破れ襖、上手一間の附け屋體、反古貼りの障子、角行燈をともし、いつもの所に門口。下の所に寒竹の生垣、出入りあり。爰に太平、以前の形にて、徳利茶碗を置き、酒を飲み、側に官藏、角内、五平太、丼を叩き、踊つて居る見得。すべて太平浪宅の體。甚句の唄にて道具納まる。

角内　甚句踊らば品よく踊れ。品のよいのをサア嫁に取る。
皆々　ヤンヤ〳〵。
太平　ヤイ〳〵、根太が抜けるから、いゝ加減にふざけろェ。

官藏　イヤモウ、こんな面白い事はねえ。併しまだ酒があるか。
角内　先刻取つたのが一升五合の酒だから、もうそんなにはあるめえ。
五平　無えと思つたから、この古挟み箱を、古鐵買ひに賣らうと云つたら、百五十に附けやァがつた。
　　ト古き挟み箱を出す。
太平　その挟み箱も、世にある時は表道具。せめて一升にでもなればいゝに。
三人　酒の無くならねえうち、もう一杯やッつけべい。
太平　これサ、よせ〳〵、足りねえ酒だ。いゝ加減にくらへ〳〵。
官藏　ハテ、こんたは惚れてゐる娘を自由にしたぢやァねえか。
五平　こちとらは酒でも飲まにやァつまらねえ。
　　トまた甚句になり、踊り出す。此うち向うより太左衞門、浪人者の拵らへにて出て、直ぐに舞臺へ來り
太左　太平どのは内か。この手合ひは何を騒いで居るのだ。
官藏　ヤア、こんたは鷺の首の太左衞門どの。
太左　オヽ、久しく見えなんだが、どこぞへ稼ぎにでも出かけたのか。

太左　四五日、脇へ用があつて行つて居たが、見りやア大層奢るが、祝ひ事でもあつたのか。
太平　ちつと悦に入つた事があつたから、みんなに骨を折らせた禮よ。
太左　そいつは耳寄りだ。太平どの、この節は運が向いて來たと見えるな。おれも目と出る事があるて
太平　ナニ、好い事があつたか。
太左　こんたの伯父御の土左衛門どのに頼まれ、上總へ行くとて木更津船の乘合ひに、小湊詣りの娘を連れた親子の旅人、その側に若い男が一人居て、乘合ひの暗がりで、若い男とその娘が、じやらくらを始めたのよ。
四人　そいつは氣が悪い。それからどうした〳〵。
太左　サア、おれも寐た振りをして居たが、業腹紛れに、その若い男の風呂敷包みを引ッ浚つて、船から上がつて　中を見たところが、コレ、見さつせえ、こんな卷物、よく聞き合せたら、これが彼の神妙劍の一卷とやら。
　ト懐中より出す。太平、取つて見て
太平　オ、、成る程、正しく神妙劍。この品こそ、實右衛門が奥州にありし時、未だ尾花六郎右衛門の昔、悴吉三郎が持つて、家出をしたと聞いたが

太左　そんならその時の若い侍ひが、吉三郎とやらかも知れねえ。
太平　思ひよらざる神妙劍の一卷。さうして、これを
太左　わしが持つてゐても役に立たぬ物、どうぞ太平にやつてくれと、伯父御の頼みゆゑ、おれは外に禮を貰つたから、この卷物はお前にやるのサ。
太平　そんなら伯父御が、おれに出世をさせようと……エ、、忝い。殊にはこなたの深切、有り難え有り難え。
太左　おれに禮を云ふにやア及ばねえ。伯父御によく禮を云はつせえ。
太平　今日はめでたい事の重なる日だ。祝ひに一つどうだな。
太左　そいつア有り難え。そんならこなた衆と
四人　ドリヤ、また酒とやらかさうか。
　ト時の鐘になり、皆々酒盛りになる。向うより豆助、箱提灯を持ち、跡より實右衛門、袴着流し、大小にて、肩衣に包みし品を抱へ出て來り、ちよつと囁く。豆助心得、門口に窺ひ居て、よろしくあつて
豆助　ヘイ、太平さまは、お内にお出でございまするか……お頼み申します〳〵。

太左　玄關に案内があるワ。
太平　掛取りなら留守だと云つてくれ。
太左　合點だ。

ト門口を明け、實右衛門を見て

ヤア、おてまへは磯貝

實右　實右衛門でござる、免さつしやい。ちよつと太平どのに御意得たい。

ト座敷へ通る。

皆々　ソリヤ來た〳〵。

太平　これサ、いづれも、立騒ぐまい。實右衛門どのを、これへ〳〵。

實右　ちとお話し申したい儀がござつて、推參いたしてござる。

太平　これは〳〵、ようこそ御入來。ソレ、お莨盆を

角内　畏まりました。

ト角内、莨盆を出し、實右衛門と顔見合せ

實右　ヤ、そちや先刻の町人。

角内　ハイ。へ、、、、、。

トしよげて片隅へ寄る、此うち下手より權平窺ひ出て、礫を打つ。これにて橋がゝりより軍藏出て來り、權平は軍藏へ槍を渡し、囁く。兩人こなしあつて、下手の藪垣の中へ入る。

太平　して、實右衛門どのには、何用ござつて。

實右　別儀でもござらぬ。最前は拙者召仕への下郎、おてまへに對し慮外を申し、既に手討とも相成るべきを御容赦下され、滿足に存ずるゆゑ、御禮の爲、わざ〳〵伺候いたしてござる。

太平　これは〳〵、御叮嚀なるそのお詞。併し、あの下郎めは、差出者でござる。それと申すも、おてまへの仕附け柄ゆゑあの行跡。向後きつと仰せつけらるゝがようござる。

實右　イヤモウ、何とも以て氣の毒千萬。つきましては、この品、あまり輕少ながら、おてまへ御懇望と承り、些少ながらお目にかけます。御無心ながらお肴臺を……アヽ、イヤ、これを拜借仕らう、

ト側の挾み箱を引寄せ、この上へ包みを載せ

時に取つてのお肴臺。島川氏、麁末の一品、御受納下されい。

太平　痛み入つたるこのお持たせ。何かは存ぜねども、辭退いたすも如何。お受け致すでござらう。

ト何心なく包みを明ける、お雪の本首。皆々見て恟り

お持たせのこの品。お肴と思ひの外

四人　こりやどうだ。

實右　即ちこの肴は、太平どの〻御好物とござるゆゑ、わざ〳〵持參いたしました。御酒のお相手、存分召上がつて下されい。

皆々　ヤア。

實右　煮魚なりとも刺身とも、不束ながら拙者が手料理、お振舞ひ申さうか。

ト刀を拔き、太平の目先へ突きつける。

太平　サ、それは。

實右　遠慮召されず幾杯なりと、お替へなされい。作り身の手練の程、この場に於てお目にかけうか。

ト　これより合ひ方。

太平　ヤア。

實右　義理ある嫁に道を捨てさせ、忰が手前この親が、面目なさにまツこの通り。よくも大勢待伏せなし、一人の女を苛なみ居つたな。

五人　イヽヤ、左樣な覺えは

豆助　無いとは云はさぬ。證據は即ちこの下郎。

ト慄へながら云ふ。

太平　すりや、何もかも……ハテ、是非に及ばぬ。いかにも、まだ手入らずのあのお雪、度々口說けど承知せぬゆゑ、その遺恨に苛なんだ。

實右　さてこそな。

太平　それゆゑ武士の表を飾り、お雪の首を討つて來たか。

實右　手にかけたれば女敵の、太平をはじめ殘りの奴等、一々に觀念ひろけ。

太平　斯うなるからは破れかぶれ。ソレ、いづれも。

皆々　合點だ。

ト木魚入りの鳴り物になり、五人一度に切つてかゝる。立廻りのうち實右衞門、太平をちよつと當てる。豆助、ウロ〳〵して逃げ廻り、在りあふ紙帳をかむり、忍んで居る。太左衞門、逃げ廻るを、ちよつと眉間を切る。これにて太左衞門、逃げて向うへ入る。この立廻りに三人を見事に切り倒す。太平、心附き、起上がり、立廻り。右の腕を切られる。此うち軍藏、後へ窺ひ出で、よき時分に實右衞

門の脇腹を槍にてしたゝかに突く。實右衛門堪りかれ、どうとなる。兩人乘りかゝつて止めを刺す。

軍藏　劍術手練の磯貝實右衛門、日頃の高慢も、騙すに手なし。まんまと首尾よく

太平　この上は當所を立退き、最前伯父の情によつて、不思議に手に入る神妙劍の一卷、かねぐ安達家にて懇望とあれば、身共は直ぐに仕官の願ひを

軍藏　その儀は拙者一家のよしみ、殿へ言上、推擧仕る。併し、直さま差上げなば、却つて妨げ。おてまへは暫らくその一卷を持つて、時節を待ち召され。

太平　なにさま、それも尤も。然らば其うち、今受けたる金瘡の療治。手疵癒えなば、その時貴公の推擧を以て。

軍藏　心得申した。當所を立退くその手當。些少なれども、これを路用に。

ト包み金を渡す。これを受取り

太平　何から何まで貴殿の深切。然らば直さま立退き申さん。さりながら、毒喰はゞ皿、とてもの事に彼れめが兩腰。

軍藏　なにさま、實右衛門が帶せし物なら、まんざらでもござるまい。

太平　左やう〳〵。

ト兩腰の血を拭ひ、互ひに見込み

軍藏　流石は實右衛門、天晴れ魂ひ。丸の中に二つ銀杏の紋ぢらし。

ト此うち紙帳、ガサ〳〵と動く。

太平　ヤヽ、爰に誰れやら。

太平　それこそ實右衛門が家來。

豆助　私しは何も存じませぬ。御免なされて下さりまし。

ト慄へ〳〵下手へ這ひ出す。

軍藏　生けて置いては後日の妨げ。

太平　下郎は口の

ト豆助を一かせ切る。豆助、逃げ廻る。この時、向うに足音するゆゑ

兩人　あの人音は

ト囁き合ひ

軍藏　コレ。

太平　心得申した。

ト思ひ入れあつてためらふ。此うち向うより友平、以前の形。藤助、袴を着流し、大小にて、友平に箱提灯を持たせ、足早に出てくる。此うち太平、窺ひ〳〵、花道の方へ行く。摺れ違うて向うへ走り入る。兩人心附かず、門口へ來り

藤助　父上のお歸り、あまり遲刻、その上どうやら胸騒ぎ。友平、ソレ案内。

友平　ハッ。……お旦那、お迎ひでございます。

ト内を覗き、暗闇ゆゑ

こりやどうだ。そんならもう、お旦那はお歸りであつたのか。

ト あちこちを見廻し、實右衞門の死骸を見附け

ヤヽ、お旦那を何者か

藤助　ヤヽ、親人樣を

ト兩人、捨ぜりふにて探り見て

友平　こりやモウ縡は切れ果てしか。

藤助　ハアヽ。

ト當惑のこなし。豆助を見附け

友平　こりや豆助……コリヤ、心を慥かに……して〳〵、お旦那を何者が

藤助　サヽ、早く申せ〳〵。

豆助　お旦那を、あの太平めが

兩人　すりや、太平めが。

豆助　私しもこの通り。その上、お旦那の兩腰まで、奪ひ取つて立退く樣子。

藤助　ナニ、兩腰までを

友平　チエヽ、いま一足早くば、と云つても返らぬこの場の仕儀。

兩人　思へば〳〵。チエヽ。

ト豆助、此うち「ウン」と落入る。

友平　不便やこれも縡は切れたか。

藤助　逃げたる島川、遠くは行くまい。

友平　跡追ひかけて

藤助　友平、來やれ。

ト行きにかゝる。軍藏、窺ひ寄つて提灯を打ち落し、藤助の腰を槍にて突く。藤助「アツ」と思ひ入

れ。友平悔り、思ひ入れあつて、軍藏を捕へようとする。立廻りちよつとあつて、軍藏摺り拔け、花道へ逃げる。

藤助　おのれ曲者。

友平　取逃がしたか、

トこれにて軍藏、礫を打つ。藤助、一時にどうとなる。木の頭。

殘念な。

ト双方よろしく、これをキザミにて、よろしく、拍子幕外、ゴンの送りにて、軍藏、一散に向うへ走り入る。跡シヤギリ。

幕

（作者　晋羽助）

二幕目

品川釜鳴屋の場

役名――釜鳴屋の抱へ、鐵灸お杉。岡村屋お春。小ぢよく、黑次。釜鳴屋の抱へ、四六のおくま。島川太平。八百屋手代、丈八。八山新五左衞門。築地法印學山、判人、狸の金八。釜鳴屋武兵衞。太鼓持ち、出羽長。同、京助。小道具屋與七。釜鳴屋の抱へ。おやま。同、おしか。同、おいの。衣裳屋文藏。下部、權平。若い者、權七。駕籠舁き、庄六。奴、友平。問屋人足、白山傳吉。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面、星の金物を打つたる跳らへの杉戸、「釜鳴屋」と記したる半暖簾、見世先へ紫の幕を打廻し、『木食上人宿』と記せし紙札、講中の丸提灯。下の方、格子造り、天水桶好みの通り飾りつけ、爰に與七、道具屋。武兵衞、亭主。金八、判人。權七、若い者。おいの、飯盛り女郎。おしか、同じく女郎にて、馬に蹴られ、目を引附けてゐるを、皆々立ちかゝり、呼び生けてゐる。すべて品川本宿の體、驛路の入つたる流行り唄にて幕明く。

ト權七、天水桶の水をすくひ、おしかの顏へ吹きかけて

皆々　おしかやァい〳〵。

武兵　これサ〳〵、其やうに怒鳴ると、却つて逆上せて惡い。マア、靜かにしやれ〳〵。

金八　時にこの子は、癲癇病みか、但し、疝癪がさしこんだのか。

いのなにサ、此おしかさんは、いま馴染みの客人が通らしつたゆゑ、裸足で駈け出したところへ、馬が通りかゝつて

權七　横ッ腹を蹴倒したから、この通りサ。氣附けでも服ませてえものだ。

金八　早くまたゝびを服ませるがいゝ。

皆々　猫ぢやァあるめえし。

武兵　何にしろ、もう一度呼び生けて見るがいゝ。

皆々　おしかさんやァい〳〵。

トこれにて心附き

しか　エヽ、口惜しいなう〳〵。

皆々　どうだ、氣が附いたか〳〵。

しか　恐ろしや〳〵。先刻馬に蹴られたと思つたら、それから夢中。どこともなく行くと思つたら、向うにお寺があつて、一面に櫻の花盛り。その下に坊樣が二人居て、鐘の供養を拜ませる事はならぬ、歸れ〳〵と云ふかと思つたら、氣が附いた。これでも白拍子の類るだねえ。

金八　そいつはお前、仕合せをした。鐘の供養の坊樣が二人、それはてつきり地獄だ。

與七　なにサ、それはてつきり木挽町の、道成寺の夢だ。

皆々　何を云はつしやる。

武兵　これ程の騷動に、お杉が見えねえ。どこへ行つた。

いのあのお杉さんは、きかない氣の女郎衆だから

權七　馬乘りの跡を追つかけて行つたかも知れねえ。

いの　何にしろ、氣が附いてめでたい。奥へ行つて、藥でも服ませませう。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト驛路の鈴、流行り唄になり、權七、おいの。おしかを介抱して奥へ入る。あと合ひ方。

金八　人通りが澤山ゆゑ、いろ〳〵の交ぜッ返しがある。

武兵　イヤ、交ぜッ返しと云へば、こなたの判で内へ抱へた、婆ァ女郎のおくま。たま〳〵客を取れば

ピンシャン〳〵振りつける。あんな女に四十の五十のと、大金を出してはならぬ。こんたの手先で、どこかへ住替へに出して下せえ。

金八　成る程、その事も聞きましたが、どうであの子は江戸へは向かず、神奈川か藤澤の代物。そいつはお氣の毒な。

武兵　そこで、おれが一つの思ひつきがある。あの女の兄判をついた、傳吉といふ奴は　大の正直者。

どういふ譯か知らねえが、あのおくまを大事にする樣子。そこを附けこんで、思ひ附きといふの

は、コレ

ト囁く。金八、呑み込み

金八　そいつは奇妙。併し、肝腎の客人にする人が

武兵　オット、皆まで云ふまい。客人にする人は、おれが見立てる。萬事は胸に〳〵。

ト思ひ入れ。驛路の鈴、流行り唄になり、向うより四つ手駕籠に、庄六、先棒。傳吉、後棒にて、文藏、町人の旅形、附いて出て來り

文藏　成る程、駕籠といふ物は、四本足のせるか强勢に早い。おれはがッかりした。

庄六　それでも旦那が、急げと仰しやりましたゆゑ

傳吉　お前さんも、お草臥れでござりませう。併し、猪牙船の後向きと、駕籠の跡から附いて廻るは、安い奴サ。

文藏　イヤ、これは御挨拶。

三人　ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。右の鳴り物にて、三人、舞臺へ來る。駕籠をよき所に下ろす。武兵衛、金八見て

武兵　若い衆、御苦勞でござります。こりやァお泊りかえ。

文藏　親方、上りには、大きにお世話でござりました。

武兵　衣裳屋の文藏さま、只今お下りでござりましたか。

文藏　今夜も又お賴み申します。

庄六　モシ、釜鳴屋の旦那、見れば、幕が張つてござりますが、あれは何でござります。

武兵　あれは、木食さまが江戸へござるが、わしどもは講中ゆゑ、今夜お宿を申すのサ。

傳吉　そりやァお泊りの旦那方は仕合せだ。お加持でもしてもらふがようござります……ハイ、旦那、お約束の所まで參りました。

ト駕籠の垂れを上げる。爰に丈八、旅形、手代にて、眠り居る。庄六、履物を直し

庄六　旦那、お履物を。モシ、旦那々々。

丈八　オイ〳〵。ヤレ〳〵、好い心持ちに、グッと一寢入り。もう釜鳴屋か。早く來たの。

武兵　これは〳〵、八百屋の丈八さま、島へでもお出でなされましたか。

丈八　イヽエ、わしは椎茸の仕入れに、甲州から駿河へ廻り、小田原で逗留のうち、旅芝居を見て、この伊勢吾といふ、人形町の衣裳屋さんと、連れになつて歸りがけ。

金八　お前さん、今夜は爰の内へ泊つて

文藏　椎茸より、松茸の仕入れがようござります。

丈八　仕入れといへば、此やうに旅歩きをして、八百屋物を仕入れるのも、内の後家御に氣に入られ娘のお七を女房に持ちたい願ひ。度々口説けど承知せぬ穴埋め、この釜鳴屋のお杉といふ女は、そのお七に生寫し、それゆゑ毎晩通つても、此奴も今に承知せぬ。こりやァ矢ッ張りお七を口説かうか、お杉を口説かうか。

傳吉　モシ〳〵、旦那、お七を口説くえ。七を口説くは當り前だが、杉を口説くは、天狗樣ではあるまいし。

庄六　うさァねえ。

皆々　ハヽヽヽヽヽ。

丈八　今日は是非とも、お杉を口説き落さねばならぬ。御亭主、こなたの威光で、得心するやう、云ひ附けて下さい。

武兵　畏まりました。何に致せ、座敷へござつて、お一つおあがりなされませ。

傳吉　これからわしどもは、歸りでも取りませう。ナァ、棒組み。

庄六　それがいゝ〳〵。

武兵　傳吉どん、貴樣にちよつと話しがある。

金八　一服のんで下せえ。

傳吉　畏まりました。

庄六　そんなら、おらァ問屋前で

丈八　酒のみませうと洒落ようか。

皆々　左樣ならお客樣。

丈八　文藏さん、サア、一緒に。

皆々　サア、お出でなされまし。

ト矢張り右の唄にて、文藏丈八は奥へ、庄六は駕籠をかたげて下座へ入る。

傳吉　あの旦那も、顔に似合はぬ、餘ッほどの女好き。いろ〳〵な惚氣話しを請けさせました……イヤ話しといへば、何か私しに

武兵　イヤ、外の事でもねえが、お前が兄判で寄越したおくまが事、それについて、めでたい話しが

傳吉　めでたい話しとは、おくまが富でも取りましたか。

武兵　なにサ、其やうな事ではない。あのおくまに、好い客人が附いて、急に身請けする筈で、立て金

の五十兩。わしが方に預かつてゐる。こなたも兄判をついた事ゆゑ、ちよつと耳へ入れて置きます。

傳吉　何の話しかと思へば、怪しからぬ事を云はつしやります。あのおくまに、外の亭主を、持たせる事はなりませぬ。

金八　これサ〳〵、お前が其やうに云ふと、話しが横になるぜ。

傳吉　そりやァなぜでござります。

武兵　ハテ、年季の内は此方の代物。住替へに出さうが、客人の方へやらうが、金との相談。

金八　殊に、五十兩といふ立て金が濟んでゐれば、今更どうも

傳吉　ならうが、なるまいが、おくまを外へ身請けをさせる事は、なりませぬ〳〵。

金八　それを傳吉どのが兎や角云ふは

武兵　どうも合點がゆかねえ。

傳吉　成る程、其やうに云はつしやるも尤もな事。何を隱しませう、あのおくまには譯あつて、外の男は持たされませぬ。それぢやによつて、どうぞ變替へして下さりませ。

金八　それは困つたもの。どうしたらようござりませう。

武兵　さればサ、此方も客人の方へやるも商賣づく。今さら變替へするも氣の毒なり

金八　傳吉どん、斯うするがいゝ。田から行くも、畔を行くも同じ事。後方までに五十兩の金を拵らへて親方へ預け、おくまが身請けを其方へすれば、双方浪風なしに納まるといふものではないか。

傳吉　成る程、それではようござるが、併し、大枚五十兩といふ金が

兩人　無いと云へば、客人の方へ。

傳吉　それだと云つて、どうもわしが

兩人　濟む濟まないは、おくまに逢つて

傳吉　後方までに

兩人　否やの返事を

傳吉　畏まりました。左樣なら奥へ參じます。御免なされませ。

ト流行り唄になり、傳吉、草鞋を提げて奥へ入る。右の鳴り物にて、向うより學山、法印の拵らへにて、風呂敷に包みし、札箱、錫杖を持ち出で來り

學山　これはどなたも、いつも〳〵お賑やかで、よろしうござります。

金八　イヤ、築地の法印さん。釜〆めで、しつかりだね。

學山　正五九は私しどもの附け目サ。時に、いま道で逢ひましたが、本鄕の八百屋の番頭、丈八さんは來てゐますか。

武兵　先刻から來てござるが、お前、馴染みか。

學山　アイ、久しい馴染みサ。

金八　馴染みといへば、あの一件に、この法印さんを賴んではどうでござりませう。

武兵　こいつはいゝ思ひ附き。ちよつと話して見て下せえ。

學山　イヤ、お心安い仲、何なりとも賴まれませう。して、その譯はネ。

金八　外でもない、斯ういふ譯サ。

ト囁く。學山、呑み込み

學山　なんだかをかしな賴まれものだが、併し、この形では

武兵　オット、それはおいらが胸にある。

金八　まづこの事はいゝが、彌作が妹のあのお杉、當分質に取つて置きやしたが、金も濟んで、身儘になつたではござりませぬか。

武兵　さればサ、あの女を脇へ出すのも惜しいもの。後金を貸して、内の抱へにしてえもんだ。

學山　その商賣話しは後にして、今の一件に、かゝらうではないかね。

金八　イカサマ、それも一つの慾張り。

武兵　委細の事は奥で詳しく

學山　そんならお二人

武兵　サ、ござれ〳〵。

ト右の唄になり、三人、奥へ入る。町人一人出て來り

町人　オイ〳〵、賴みませう〳〵。

權七　ハイ〳〵、何でござります。

ト奥より出て

これは問屋の衆、何でござります。

町人　今夜爰の内が木食さまのお宿の筈であつたが、急に魚沼の方へござるゆゑ、ちよつと知らせに來ました。講中の衆へもこの事を

權七　アヽ、さうかえ。そんなら晝見世を……モシ〳〵、今夜木食さまはござらぬゆゑ、どなたも見世をお張りなさい。

ト鹽笊を取出し、見世へ鹽を蒔く事あつて

この幕も、明がらすとしやせう。

ト件の幕を取る。見世の正面に、貫盆を扣へ、おくま、おやま、おしか、紋附きの木綿、やつしを引ツ張り、宿場女郎の拵らへにて居並ぶ。權七、樽へ腰をかける。右の鳴り物にて、向うより黒次、しみつたれたる小じよくにて、大きな雪駄を穿き、膏藥の袋、蓋茶碗に饂飩の入つたるを兩袖にて持ち、鼻唄にて出てくる。

權七　この餓鬼は、外へ出ると遲い。何をして居やァがつた。

黒次　おとらさんが、膏藥を取りにゆく次手に、饂飩を買つて來てくれろと云はしつたから、茹でるうち待つて居たのだよ。

權七　内が忙がしいに、早く歸りやァがれ。

黒次　そんなに云はなくつてもいゝわな……むごいばかりが男といはぬ。たまにや情もかけさんせ。

トそゝり唄を唄ふ。

權七　エヽ、この餓鬼め。

トくらはさうとする。黒次、逃げて入る。

やす　權七どん、今日は貴見世は無いと思つたゆゑ

しか　うつかりして、どんなにうろたへたらう。

くま　わちきも滅相にうろたへたよ。部屋で夏書をしてゐて、南無阿彌陀佛々々々々々々々。

權七　なんだな、おくまさん、また念佛か。この子は、と云ふもをかしい大年增のおくまさん、お前は毎晩客人を悪くするゆゑ、お茶ばかりひいてゐる。ちつと元氣を出して、氣を附けなせえな。

くま　アイ、わたしを思うて、其やうに云うて下さるは嬉しいけれど、此やうな勤めをしながらも皆々客人に逢ふのが否かえ。

くま　どうぞ、その事ばかりは

權七　成る程、こいつは呆れたものだ。

ト思ひ入れ。曲馬の鳴り物になり、向うより鞍置き馬に、新五左衛門、遠乘りの侍ひにて乘り、お杉、宿場女郎の拵らへにて、馬の尾筒を取り、引摺りながら出て來り

新五　これは危ない、萬歳樂々々々々。見掛けによらぬ強い女だ。こりやァ身共を、どうする〳〵。

すぎ　どうもする事ではない。わたしは女の事ゆゑ、何も存じませぬが、先刻お前さんは、あの子供衆を、踏み殺してお通りだが、其やうなお許しを、どこから受けてお通りだえ。これサ、挨拶をお

しな。此やうな安い女郎でも、人間に二種はないよ。朋輩の事ゆゑ、お前さんをお連れ申した。
サァ、白い黒いの挨拶してお出で。わたしも釜鳴屋の鐵灸お杉、宿場を稼ぐ飯盛りでも、そこが
江戸ッ子、騰がござりやすよ。
新五　尤もぢや〳〵。どうぞ料簡してくれ〳〵。
すぎ　料簡も狐拳も、あそこへ行つての事サ。
新五　そんならどうでも
すぎ　これから跡へ戻り馬。
新五　ヤ。
すぎ　酒手で廉く乗せ申すわな。
ト舞臺へ引戻してくる。皆々見て
權七　ヤァ、お前はお杉さん、この馬は
すぎ　先刻お前に怪我をさせたお侍ひ樣、馬から下りて、何かのしらちを
新五　イヤ、身共は主用、是非とも爰から
すぎ　イケ情の強い。下りずば、わたしが

ト新五左衞門を馬から引下ろす。
新五　ア、、危ない。靜かにしてくれ。エ、、これといふも、おのれが悪いからだ。爰な、ほてッぱらめ。
ト馬の尻を叩く。馬は刎ねかへり、下座へ逃げて入る。新五左衞門、逃げようとする。
しかどつこい、お前が相手だ。逃がしはせぬ〳〵。
新五　イヤ〳〵、逃げはせぬ。此方の不調法、料簡してくれ〳〵。何にしろ、あの馬が
權七　イヤ〳〵、なんであらうと、問屋場へ屆け、存分にしにやァなりませぬ。
新五　コレ〳〵、姐え達、詫び言を、賴む〳〵。
やま　モシ〳〵、お杉さん、この方がたつての詫び言。
くま　もう堪忍しておあげなされまし。
すぎ　料簡のならぬ所なれど、折角お前方の御挨拶ゆゑ、料簡いたしませう。
新五　その代り、膏藥代をくれろと云ふのか。
すぎ　イエ〳〵、其やうな事ではない。仲直りのしるしに
新五　酒手を寄越せか。

すぎ　イエ〳〵、さうでもない。
新五　そんなら何を。
すぎ　遊んでお出で。
新五　ヤア。
すぎ　サア、子供でもあげて、一つあがつてお出で。
新五　イヤモウ、それで濟む事なら、此方も好きの道。して、身共が相方は
すぎ　あのおくまさんを
くま　モシ、わたしやお客を取る事は。
やま　これはしたり、お客を取らねば、内の首尾が
くま　それぢやと云うて。
すぎ　ハテ、此やうな田舍侍ひ、どうしてもよいわいなア。
新五　ナニ、田舍侍ひとは。
すぎ　サア、異な事を云はずとも、お前の相方はこのお方。
新五　然らばこの女郎が、身共の相方か。ハテ、大年増なア。

すぎ　お前が否と仰しやれば、此方も又料簡が……ナア、おしかさん。
しか　わたしや先刻の所が、ア、痛い〳〵。
權七　こいつはいよ〳〵、問屋場へ屆けて
新五　ア、コレ〳〵、是非がない。今夜は爰許で一宿いたさう。
皆々　サア値が出來た。そんなら、おくまさん
くま　どうでもわたしを。ア、情ない。
新五　ア、此方も情ない。
權七　お客だよ。
ト奥にて
子供　アイ、。
新五　若い者、案内おしやれ。
ト敵討櫓太鼓
ト流行り唄になり、權七、案内して、新五左衞門、跡よりおくま、悄れて奥へ入る。お杉、おやま、おしか殘る。奥より丈八、文藏、おいの出て來り、丈八、お杉を見て
丈八　イヤ、そこに居るはお杉ではないか。あまり暑さに、風に吹かれてゐるのか知らぬが、おぬしが

居ぬゆゑ、浮かぬはこの丈八。いつぞやから度々通へど、まださつぱりと打解けてくれぬが、今日は是非とも、頼む〳〵。

文藏　お前と同樣、おれもおいのぼうを

いのオヤ〳〵、わたしのお客はお前かえ。好かないよ。

しかそんなら、わたしはお太鼓かえ。オヤ、好かないよ。

丈八　好いた好かぬは初手のうち。斯うおぬしに打込んだからは、一寸先は闇もいとはず、是非とも今日はおぬしとしつぽり

すぎ　わたしやどうあつても、お前へ出る事は

丈八　否だといふのか。

すぎ　アイ。

丈八　ヤア。

すぎ　それもたつてと云ふ事なら、わたしの顏の立つやうにして下さんせ。

丈八　オット皆まで云ふまい。夜具は元より襠襠から、物日の仕舞ひ、それも合點、まづ今夜は內中で惣花、藝者を大勢呼んで洒落たら、まんざらでもあるまい。

すぎ　そんなら必ず

丈八　オット呑み込み。オイ、誰れぞちよつと來て下せえ。

トこの時、下座より庄六出て來り

庄六　オヽ、先刻の旦那、私しでよいなら

丈八　オヽ、駕籠のこなたでも大事ない。岡村屋といふ茶屋へ行つて、太夫女藝者、ありッたけ呼んでくれと、云ひつけて下せえ。

庄六　ハイ〳〵、畏まりました。

すぎ　モシ、あの人へも

丈八　オット合點。ソレ、骨折り賃。

ト紙入れより金を出してやる。

庄六　エ、私しへ御祝儀。

丈八　急いで行つてくれ。

庄八　ハッ、飛ぶが如くに。

ト語りながら向うへ走り入る。この時、揚げ幕の內にて

友平　これは皆様御存じの一文奴。評判々々。

ト槍踊りの合ひ方になり、向うより友平、捻切り奴、藁の槍を持ち、ツカ〳〵と出て來り

今度この度、殿の御入府、宿入り下馬先、行列揃へて、振りこめ〳〵、サッサ、よやまかしよ。

トこれより地へ取り、槍の振り、ちよつとあつて舞臺へ來る。皆々見て

皆々　ヤンヤ〳〵。

やま　お杉さんの好きな、いつもの奴さんが來たわいなア。

すぎ　ほんに、いつ見ても、くつきりとした奴さん。

丈八　ハヽア、、そんならお杉は、この奴に惚れてゐるか。

すぎ　アイ。

丈八　ヤア。

すぎ　サア、腹からの物貰ひとも見えぬ奴さん。どうやら、いとしらしい……サア、いとしい物貰ひでは

はないかいなア。

丈八　イヤモ、おぬしが其やうに思ふもの、只も歸されまい。ソレ、手の内を

ト金を捻つて投げてやる。

文藏　ヤア、奴、〆めたな〳〵。

友平　〆めた段ではござりませぬ。今日はずつしり錢になつた上、お客樣から又お金を下さるとは、一

女奴が福德の三年目。爰の見世先を借りて、ドリヤ、錢勘定いたしませうか。

ト流行り唄になり、捨ぜりふにて友平、下の方へ行き、懐より紙袋を出し、勘定してゐる。此うち向

うよりお春、引手茶屋の女房にて出て來り

はる　これは〳〵、丈八さん、よう入らつしやりました。どなたも今日は。

やま　岡村屋のお春さん、お出でかえ。

丈八　今云つてやつた、藝者はどうだ〳〵。

はる　この節は、怪しからず賑やかゆゑ。藝者衆は一向ござりませぬ。やう〳〵太夫衆を一組、口を掛

けてやりました。

丈八　そんなら藝者は切れ物か。是非がない。太夫一組で、下直の方も又よい。

すぎ　モシ、丈八さん、藝者衆が無いとあれば、そんなら座敷へ、あの奴さんを

皆々　そりやァようござんせう。廊下で今の槍踊りを

丈八　イヤ、とんだ事を云ふ。あの奴は物貰ひ。どうして座敷へ

すぎ　呼ばれぬところを、どうぞして、座敷へ呼ぶのがわたしへ心中。ナア申し、奴さん。

友平　有り難うござりまするが、私しがお座敷へ上がりましたら、犬が吠えませう。

文蔵　オヽ、さうだ〳〵。薄穢ねえ物貰ひ。

丈八　座敷へ來る事は、ならぬぞ〳〵。

すぎ　お前が成らぬと云はしやんすりや、わたしもお前の座敷へは

丈八　そんなら槍持ち、御苦勞ながら。

友平　でも、私しは

はる　物貰ひというたとて、乞食非人といふではなし

いの　そこはわたしらが呑み込んで

すぎ　そんなら座敷へ

友平　お許し受けて

丈八　皆も一緒に

皆々　サア、お出でなされまし。

ト流行り唄になり、この一件殘らず入る。引違へて權七、おくまを連れ出て、奥の方へ向ひ

權七　旦那、マア〳〵、御料簡なされまし。この子は私しにお預けなされまし……モシ、おくまさん、どうしたものだ。毎日毎晩、あんまりでござります。

くま　サア、わたしも、よんどころなう勤め奉公するゆゑ、お客の座敷へ出てゐるを、其やうに

權七　云はないでどうするものか。先刻のお侍ひ樣が、お前の側へ寄ると、ケン〳〵するゆゑ機嫌が惡い。兎も角もして、客人を寐かし、二度見世を張らにやアなりませんぢやないか。

くま　そんなら又見世へ出て、お客を取るのでござんすか。

權七　ハテ、四六屋體で、一人や二人の客を取つて、間尺に合ふものか。一日に十五六人づゝも、廻しを取るのは當り前だ。テキパキして、また見世へ出なせえ。

くま　そんなら又、顔を晒しに

權七　それが四六のあたぼうサ。

くま　ても情ない。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト思ひ入れ。また唄になり、おくま、しを〳〵として正面へ座る。この唄をかりて向うより太平、深編笠、浪人の拵らへにて、手紙を讀みながら出る。跡より權平、旅形、道で行きあひし心にて、附いて出て來り

權平　あなたに好い所でお目にかゝりました。爰は途中の儀なれば、御返事は御口上でよろしうございます。

太平　イカサマ、書面で拜見いたすところ、近々神妙劍の一卷持參の上は、鎌倉の安達家へ、推擧いたすべきとの文體。殊更お心附けられし、金瘡の藥まで添へられ、併し、辰の年度揃ひし男子の生血を取り得て、この藥を服する時は、いかなる金瘡たりとも、忽ち全快との事。して、その一藥は。

權平　卽ちこれに持參いたしました。サ、お受取り下さりませ。

ト懷より出して太平に渡す。

太平　何から何まで拔け目なき、軍藏どのゝ計らひ。身共も伯父の方に掛り人の儀なれば、何か心に任せず、お禮旁々御貴面の節と、軍藏どのによろしく申し傳へてくりやれ。

權平　畏まりました。きつと御傳言申すでございませう。

太平　大儀であつた。

權平　ハッ、左樣なら

ト引返して入る。太平、二品を懷中して舞臺へ來る。權七、太平の袖を引ッ張り

大南北全集

權七　モシ〳〵、お上がりなされませ。

ト引く。

太平　身共は左樣な者ではない。放しやれ、

權七　好い子供衆がございます。お泊りなされませ。

太平　ハテ、聞分けのない。放せと申すに。

ト權七を振り切るとて、思はず一卷を落し、これを知らずに舞臺を通り、東の歩みへかゝる。この時奥にて

黑次　權七どん〳〵。

ト呼びながら出て

お客がちよつと

權七　エ、、又ごてつくか。ハテ、忙がしい。

ト兩人奥へ入る。正面のおくま、落ちたる一卷に目を附け、ツカ〳〵と走り下り、袱紗包みの一卷を取り、中を開いて、上書を見て

くま　ヤ、、こりや神妙劍の一卷。

ト太平これを聞きつけ、懐を探り見て、ツカ〳〵と舞臺へ戻り、おくまが持つたる一卷へ手を掛ける。

兩人爭ふはずみ、太平の編笠取れる。おくま、一卷をちやつと持ちかへる。

太平　それを。

トかゝるをその手を、おくま、チツと取り

くま　モシ、お客さん、遊んでお出で。

太平　イヽヤ、身共は外々へ

くま　お馴染みのお方があつて

太平　なか〳〵左樣な者ではない。戯むれ云はずとその品を

くま　堅くろしい、流石はお武家。して、お前さんは。

太平　サ、身共は……オヽ、それ〳〵、身は鎌倉にて大家の家來、幼年の頃より、その一卷を持參なし武術修行の爲、諸國の遍歷。

くま　ヤヽ、さう仰しやれば、此方にも心當り。して、あなたの御家名は。

太平　仔細あつて、その名はどうも

くま　云はねどそれと、あなたの御家名。

太平　ヤヽ、なんと。

くま　他家に類なき神妙劍、御所持なされて諸國修行と、聞き及ぶあなたは正しく、尾花六郎右衛門さまの御惣領、吉三郎さま。

太平　イヽヤ、身共は

くま　ハテ、お隱し遊ばすな。十三年以前、家出なされた跡へ、私しは御奉公にあがり、仔細は詳しう承り居ります。お顔こそ存ぜねど、この一卷を御所持の上、その兩腰の緣頭、見覺えのある、丸に二つ銀杏の紋ぢらし、それをお帶しなされるが、慥かな證據。さすれば疑ひもなき、古主の御惣領、尾花吉三郎さま。私し事は、くまと申しまして、親旦那へ仕へし者。モシ、若旦那、おなつかしう存じまする。

ト此せりふのうち、太平こなしあつて、俄に氣を替へ

太平　さては其方は、我が方に奉公いたせしとか。仔細殘らず存ぜし上は、包むに詮なし。いかにも某は、奥州の浪人たりし、六郎右衛門が悴吉三郎。十三年以前國遠なし、不孝ながらも父母の、訪ひ音信も致さぬが、御兩親には、御安泰に居らせらるゝか。

くま　すりや、あなたにはお家の浮沈を、御存じはござりませぬか。

太平　ヤヽ、家の浮沈とは心がゝりな。して〳〵、その仔細は。

くま　サア、申し上げるも涙の種。あなたの家出なされた跡にて、親旦那様には、大家へ御仕官なされしと風の便り、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、おいたわしや親旦那には

太平　如何なされしぞ。

くま　人手にかゝつて、お果てなされましたわいなア。

太平　ナニ、親人には、人手にかゝり御最期とや。ハヽア……某お側に在り合さば、かゝる横死はあるまいに、家出なしたるこの身の不孝。して〳〵、敵は何者なるぞ。

くま　サア、その敵と申すは、浪人組の島川太平とやら。

太平　すりや、敵は島川太平とな。して、その者の年恰好は。

くま　あなたの爲には親御の敵、その面體は御存じないか。

太平　イヽヤ、島川太平とやら、存じやう筈がない。して、其方は。

くま　どう致して私しも

太平　知らぬと申すか。

くま　ハイ。

太平　それで身共も落ちついた。

くま　エ。

太平　イヤサ、落ちつかれぬはこの身の上。それは格別、合點ゆかぬは、何ゆゑにこの所に、かゝるいぶせき勤め奉公。

くま　申し上げるも恥かしながら、弟御の染五郎さま、敵討の御出立に、路川とてもお心に任せず、命の恩あるお主様の若旦那、それと云はずに年たけた、私しが身を賣つて、何かを調へ御出立。

太平　すりや、其方が身代にて、弟は敵討の、出立を致せしとな。ハテ、忠節な者ぢやなア。

くま　心ばかりのお主へ忠義、お恥かしう存じまする。

太平　我れはそれには引更へて、國遠の不孝にて、今まで知らぬ父の仇。この上は、弟にめぐり逢ひ、兄弟一致に心を合せ、敵島川太平を討つて、父へ手向けん。何は兎もあれ、その品を

くま　イヤ、この一卷、お手渡す事は成りませぬ。

太平　とは又なぜに。

くま　あなたが御所持なされては、元より好む武術の御修行、又ぞろ國遠遊ばしては、父御へ御不孝。御本望お遂げなさるまでは、私しが慥かにお預かり申しまする。

太平　すりや、その品を。
くま　きつとお預かり申しました。
太平　ハテ、是非に及ばぬ。
くま　ヤ。
太平　サア、是非とも云はれぬ其方の忠義。然らば身共は
くま　わたしが馴染みのお客と云うて
太平　何かの話しは奥座敷で
くま　左樣なれば、吉三郎さま。
太平　ア、コリヤ。
くま　アイヤ、お馴染みのお客
太平　そんなら、おくまぼう。
くま　アイ。
太平　枕並べて、待つて居るぞよ。
　　ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。おくま、跡を見送り

くま　ハテ、思ひがけない、この神妙劍の一卷、大旦那奥州にござる時、常々のお物語りに、世に類ゐなき神妙劍の一卷を、悴吉三郎所持なして、國を立退きしとの事。その跡にて大旦那は、鎌倉へ移らせ、やみ〳〵との横死。それを御存じなき若旦那、お顔は知らねど、お腰の物の御定紋ひ、この品を御所持なさるゝもの、外にはない古主のあなた。どうぞ御本意を遂げさせたく、お足をとゞめん爲、大切な品を預かりしが、人出入り多きこの家の内。ハテ、よい置き所が
　　トこなし。奥より傳吉、出て來り
傳吉　あのおくまさんは、お客の座敷にも見えぬが、どこへござつたしらん。
くま　ヤア、弟傳吉か。わしや其方に、大分話したい事があるゆゑ、逢ひたかつたわいの。
傳吉　わしもお前に、話したい事がある。さうして、お前の話しは。
くま　わしが話しといふは
　　トこの時、おいの出て
いの　おくまさん〳〵、先刻の馬乘りが、ぴん〳〵刎ね出したよ。早くお出でよ〳〵。
くま　時も時とて。マア〳〵、待つて下さんせ。コレ〳〵傳吉、これは大事の品。わが身に預けて置く
　　ほどに、大事に持つてゐてたも。

傳吉　アイ〳〵、しつかりと預かりました。

ト受取る。

いの　これサ、早くお出でといふに。

ト捨ぜりふにておくまを引立て、奥へ入る。

傳吉　是非話さねばならぬ事。早く來て下さりまし。聞分けの無い、あのヨイ〳〵女郎め。無理に連れて行き居つた。それはさうと、何だか結構さうなこの卷物。觀音樣へ納める、お經と見えるわい

ト捨ぜりふにて、件の一卷を懷中する。奥より學山、醫者の形に着替へ、金八、武兵衞附いて出て來り

武兵　金六どの、今の話しは、この旦那の方へ振りむけるつもりに、手を打つて下せえ。

金八　何にしろ、めでたい話し。當人も喜ぶでござりませう。

學山　イヤ、當人は兎もあれ、わしも安堵しました。

傳吉　これは皆樣、何かニコ〳〵と、めでたい事とは何でござりますな。

武兵　傳吉どのか。好い所に居さしつた。こなたにも話して置いたおくまが事。いよ〳〵この旦那の方へ、身請けの相談、めでたいとは、その話しサ。

傳吉　イエ〳〵、その事は、最前も申します通り、おくまが身請け、外へは成りませぬ〳〵。

學山　それでも、わしが方から、立て金の五十兩も遣はしたれば

傳吉　イエ〳〵、わしが方から、と云つても金は無けれど、外の男を持たせる事は成りませぬ。して、お前樣は。

學山　おれは築地の法印

武兵　エヘン〳〵。

學山　なにサ、おれは佐保典庵といふ、鎌倉の御典醫だ。

傳吉　たとへ、仙人掌でも心太でも、おくまを遣る事は成りませぬ。

武兵　此方はどこへ遣るも同じ事。そんなら五十兩の金はあるか。

傳吉　どうして、駕籠舁き風情。いま爰に

三人　無ければおくまは此方へ身請け。

ト立ちかゝる。

傳吉　モシ、マア待つて下さりませ。

三人　エヽ、面倒な。何をするのだ。

ト三人、奥へ行きかけるを、傳吉、支へるはずみ、懐より一卷を落す。此うち與七出かゝり居て、ツカ〳〵と寄り、一卷を取上げ、さてはトこなし。傳吉心附き、引ツたくり、懐中する。

傳吉　たとへどのやうに云はつしやりましても、おくまに外の男を持たせては、どうも私しが濟みませぬ。

武兵　そりやア何を云ふのだ。客人の方へ行けば、女も出世といふものだ。

學山　それを爰で兎やかう云ふは

三人　どうも合點がゆかねえ。

傳吉　成る程、左樣仰しやりまするは、御尤もでござりまする。何を隱しませう、あのおくまは、私しが遁がれぬ者。あのやうに致して居りましても、歴とした亭主がございます。しかも、子までなしたる仲なれど、譯あつて、離れ〴〵の親子三人。年長けての勤め奉公も、云ふに云はれぬ浮世の義理。末々は、元の夫婦に致しませねば、どうも私しが濟みませぬ。それゆゑ外の男は持たせられませぬ。

金八　兄になつて判を捺すも古いやつだが

武兵　おくまは貴樣の女房か。

傳吉　どう致しまして、左樣な事ではござりませぬ。

學山　そんならそれにして、聞き屆けてやらうが、親方の方へ、立て金の五十兩は。

傳吉　サ、それは。

學山　無けりやア理詰めで此方へ身請け。

傳吉　アヽモシ、それでは。

三人　そんなら金か。

傳吉　サア

三人　身請けをさすか。

傳吉　サア

四人　サア〳〵〳〵

傳吉　切端つまつたこの場の仕儀。何としたらよからうなア。

ト思ひ入れ。與七、始終窺ひ居て

與七　オイ、若いの、ちよつと來さつせえ。

傳吉　ハイ、何の御用で

ト下手へ來て、こなし。

與七　外の事でもねえが、先刻から聞いて居れば、何やら難儀の樣子。金で濟む事なら、埒を明けるがようござる。

傳吉　サア、さう思へど、大枚五十兩といふ金が無ければ

與七　濟まぬと云はつしやるか。

傳吉　左樣でございます。

與七　その金、わしが貸してやりませう。

傳吉　エ、そんならお前が

與七　貸してはやらうが、その代り、五十兩の抵當が無ければ。

傳吉　借りたいは山々なれど、五十兩の抵當と云つては

與七　有る〳〵。貴樣の懷にある今の卷物、それを屋敷方へ賣れば、百兩や二百兩にはなる代物。それをわしに預けたなら

傳吉　お貸しなされて下さりまするか。

與七　道具商賣のわしゆゑ、買出しに持つて來た金が、爰に五十兩、これを貴樣に貸してやりませう。

傳吉　左樣なら、この卷物は、大金になる物でございまするか。私しはお經かと存じました。これもおくまの身代金、左樣ならこれをお預け申して

ト渡す。

與七　ソレ、五十兩、改めて受取らつせえ。

傳吉　有り難うございます。

ト金と卷物を取り交し。傳吉、元の所へ來て

サア、釜鳴屋の御亭主。ちよつとそれへ出てもらはうかい。

三人　なんだ、大層な事を云ひ出した。

武兵　おれに用とは、なんだ。

傳吉　外でもない、おくまが立て金の五十兩、改めて受取らつせえ。

ト金を出す。

武兵　ヤア、こりや正眞の小判で五十兩。

三人　どうして出來た。

傳吉　そこが錢金は湧き物。五十や百の目腐れ金に手づかへるやうな、傳吉でもないのサ。

學山　これは恐れ入つたものだ。
金八　成る程、傳吉どのは働き者だ。
傳吉　なにサお前、この位な事は何でもないのサ。
武兵　これで相談も極まつたといふもの。
金八　只お氣の毒なはお醫者樣。
學山　仕合せしたは此方の御亭主。
與七　拋出し物で道具屋も
武兵　まんまと首尾よく
金八　大金儲け。
學山　祝ひに一つ
四人　ヨイ〳〵〳〵。
　　ト手を〆め
　　ドリヤ、一杯やりませう。
　　ト流行り唄になり、與七は件の一卷を持ち向うへ、學山、金八、武兵衛は奥へ入る。傳吉殘り、こな

しあつて
傳吉　ヤレ〳〵、嬉しや。これで姉御の苦患は助けてあげたが、先刻預かつた代物は、どういふ大事な品やら。あれを此方へ取戻すと、云うても大枚五十兩。また苦勞が出來たわえ。
　　ト流行り唄になり、傳吉、思案のこなし。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。
　　本舞臺、三間の間、平舞臺、正面、安見世の襖、左右腰障子、よき所へ麁末なる蒲團を敷き、酒肴取散らし、床の上に新五左衞門、手酌にて酒を飲んでゐる。下の方、二階の上がり口。すべて奥座敷の體。椀久の唄にて道具納まる。
新五　隣座敷で大分洒落をる。あの唄は椀久とやら。自體我れらは都の生れ。此方は西國の生れ。色に一向そやされぬ、いま〳〵しい。あの女郎は何を致して居る。誰ぞ來いよ〳〵。
　　ト手を叩く。奥より黒次出て來り
黒次　なんでありますえ。
新五　身共が相方のおくまとやらを、早く連れて參れ。
黒次　いま連れて來ます。その代り、大森細工の玩具を買つておくんなさいまし。

新五　オヽ、合點ぢや〳〵。早く呼んで來い。
黑次　アイ〳〵、おくまさんえ〳〵。
　　トこれにておくま、引逆へて出て來り
くま　モシ、堪忍して下さいまし。いろ〳〵取込んだ事があつて……さうして、わたしをお呼びなされたは、何の御用。
新五　客が女郎に何の用があらう。サア、此方へ寄つてしつぽりと。
くや　イエ〳〵、わたしは男を斷つて居ります。
新五　ナニ、女郎が男を斷つてゐる。怪しからぬ事を申す。然らば身共が願ほどきを
　　トしなだれる。おくま、振りほどいて
くま　モシ、お武家樣、お嗜みなされませ。侍ひが色に耽り、身を亡ぼしたる事、唐土にては周の幽王また殷の國王、妲妃が爲に國を傾ける。我が朝にても名將勇士、國家を傾けしためし少なからず。されば古語にも、傾城傾國と申すではござりませぬか。
新五　ムウ、成る程。イヤ、その又堅い事を云ふ所が一しほ。こりやモウどうも
　　トしなだれる。

くま　モシ、そりや御無體。お放しなされませ。
　　ト逃げるおくまを追ひ廻す。奥より傳吉出て來り、この體を見て、新五左衞門を突きのけ、おくまを圍ひ、眞中へ出る。新五左衞門見て
新五　ヤ、其方は。
傳吉　お侍ひ樣、憚りながら此おくまは、お前樣の自由にはなりますまい。
くま　ほんに好い所へ
新五　ヤイ〳〵〳〵、見れば素町人め、案内もなく臑を踏み込む慮外者。この寢所は身が城廓。麁相があるると
傳吉　免さぬと云はつしやるか。そりやア此方から云ふ事でござる。
新五　そりや又なぜ。
傳吉　ハテ、此おくまは、身請けが濟んだからは、お侍ひ樣、必ず手出しはなりませぬ。
くま　ナニ、わたしが身請けが濟んだとはえ。
傳吉　親方へ五十兩の立て金して、さらりと濟んだ今日の身請け。
くま　その大枚の五十兩、どうしてそれを

傳吉　それには、いろ〳〵譯のある事。何かは後で話しませう。
新五　たとへ身請けしようが、初會に上がつた身共、そんな事に頓着はない。是非とも今夜は身共の物ぢやぞ。
傳吉　イヤ、その女には主がござる。
新五　なんと。
傳吉　しかも歴とした亭主がある。
新五　して、その亭主は、いづくの誰れだ。
傳吉　アイ、小鬢ながら、わしでござります。
新五　ヤア。
くま　アコレ、滅多な事を。
傳吉　ハテ、亭主では相談が出來ぬゆゑ、兄の判をついたこの女、洗つて見ればわしが女房。それを自由にすると云へば、こなたは間男、それ承知か。
新五　ヤア。
傳吉　これからこなたの首を取らうか。

新五　アヽ、コレ〳〵、待つてくれ〳〵。女郎買ひに來て、首を取られてたまるものか。君子は危ふきに近寄らず。身共は歸るぞ〳〵。若い者、預けた大小を持て〳〵。
權七　ハイ〳〵、畏まりました。
ト奥より大小を持つて出て來り
あなた、もうお歸りでござりまするか。まだよろしうござります。
新五　イヤ〳〵、あのおくま、身共を振りつけ、ぴんしやん致す。その筈、あの男は、以前は兄と申したれど、誠はくまが亭主との事。それでは我れらへ靡かぬ筈。それゆゑ、歸るぞ〳〵。
權七　フム、そんなら兄と云つた傳吉どのは、おくまさんの亭主であつたか。道理こそ、客を惡しくすると思つた。
新五　サア、歸るぞ〳〵。
權七　ハテマア、よろしうござります。左樣なら、外の子供衆をお見立替へなされまし。
新五　イカサマ、それもさうだ。ハテサテ、女は慾を知らぬ。身共が女房になれば、この度安達家にて神妙劍の一卷を所持する者を尋ね出さば、御褒美との事。また持ち主は、五百石にてお取立て。身共もその品を尋ね出さば、忽ち御加增。その時は、おくまは身が奥方。どうだ〳〵。

ト おくまにしなだれ寄る。この以前より太平、出かゝり居て、新五左衞門のせりふを聞いて、思ひ入れ。

くま　有り難う存じますが、どうもその事ばかりは

新五　ならぬと云ふほど思ひが増すわえ。

ト寄るを傳吉隔てゝ

傳吉　主ある女を、聞分けぬ二本棒め。

新五　ナニ、二本棒とは、うぬの頬桁を

ト權七の持つたる刀を取つて立ちかゝるを、權七何心なく差添を置き、新五左衞門をなだめる。傳吉、悔りして、おくまの後へ隱れる。

傳吉　アヽ、御免なされまし〳〵。

新五　うぬ、それへ直れ。眞二つに

權七　マア、御料簡なされまし〳〵。

ト新五左衞門をなだめながら、兩人奥へ入る。この時、太平、ツカ〳〵と出て來り

太平　今の侍ひが申すを聞けば、この身の願ひの時節到來。預け置いたる一卷を、どうぞ身共へ。

くま　畏まりましたが、一卷をお渡し申す時は、あなた樣には又ぞろ國遠。

太平　ヤ。

くま　サ、それぢやによつて一卷は、お心なう若旦那。

傳吉　モシ、姉貴、このお方を、若旦那と云はつしやるは

くま　其方にもかねゞ〳〵話した、古主尾花の御惣領、家出なされた吉三郎さま。

傳吉　すりや、お噂ありしお前の御主人。お顏は知らねど、わしが爲にもお主筋。

太平　いかにも吉三郎と申す者。神妙劍の一卷を以て、いづれへなりと仕官にありつき、殿へ願うて敵討と、思ふに甲斐なき病氣の某。一卷は其方に預け置き、弟に手渡しなし、親の敵を討ちおほせその上にて鎌倉へ歸參なし、父の家名を引起せよと、傳言賴む。我れは草葉の蔭より……南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとする。おくま、あわてゝ留める。傳吉、刃を見て慄へる。

傳吉　アヽ、光る脇差。南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

くま　モシ、若旦那、こりや何ゆゑに御生害。

太平　何ゆゑとは、情ない我が身の上。諸國遍歷なす折柄　島川太平が餘類の者か、某を暗討ちにせん

と切りつけて、この如くこの腕の疵、破傷風の病となり、日夜の苦しみ大方ならず。されどもこの疵を癒やさんには、辰の年月日時揃うた、男子の生血を以て、この薬に混じ合せ、服する時は忽ち全快との事。薬はあれど、年度揃ひし血汐無ければ、なか〳〵本復思ひもよらず。生き長らへて腰抜け武士と云はれんも殘念。それぢやによつて、いつその事に。

トまた死なうとする。おくま留める。

くま　モシ、必ずともに、お急きなされますな。

傳吉　私しは眩暈病み、光る脇差は、どうぞ納めて下さりませ。

くま　若旦那さま、死は一旦にして易しとやら

太平　生は得がたきもの。それぢやによつて

くま　モシ、旦那様、あなたのお望み、叶へませう。

太平　ヤ、なんと。

くま　モシ。

ト囁く。太平、呑み込み、傳吉の方を見て

太平　そんなら彼れは

くま　ア、モシ……サア、御本復の上は、いづれへなりと御身を寄せ、時節を待つて御本望を

太平　首尾よく達するそれまでは、活計をしのぐ右の一卷。

くま　イカサマ、それも御尤も。然らばあなたへ……コレ弟、最前預けし卷物を

傳吉　エ、……あの卷物は

くま　いま聞く通りの譯ゆゑ、早う戻して

傳吉　サア、あの卷物は

くま　どうぞしやつたか。

傳吉　先刻、買ひ取るといふ人があつたゆゑ、賣つてしまひました。

兩人　ヤア〳〵〳〵。

太平　無ければならぬ大切な品。して、何者の手へ渡した。

傳吉　サア、どこの人やら、道具屋らしい、知らぬ人に。

兩人　エ、、、、。

ト恟り。太平、傳吉を引附け

太平　いかに心なき町人なればとて、折角手に入つたあの一卷……イヤサ、あの一卷なき時は、たとへ

本望達するとも、本地へ歸參は思ひもよらず。さすればおのれは家の仇。ア、、どうしてくれうト有りあふ品にて傳吉を打据ゑる。

傳吉　サ、、御尤もだ。さりながら、其やうな大事な物とは知らず、ツィうつかり……御免なされませ御免なされませ。

太平　其方とても麁忽千萬。其方に預け置いたを、何ゆゑあつてこの者へ

くま　預けし仔細は私しも、多くの人の立入る中、過ちあつては如何と存じ、他人にあらぬ弟ゆゑ、暫しの間と渡せしが、思ひの外のこの難儀。御立腹は御尤も。とくと詮議いたして差上げませう。暫しが間、お待ちなされて下さりませ……コレ、弟。

太平　何ゆゑ大事の品を人手に渡し、金子を取つた。それ吐かせ。

傳吉　サア、その金は。

太平　但し私慾に迷つたか。

傳吉　イエ〳〵、左樣な事ではござりませぬ。これには段々譯のある事。

くま　そんなら早うその譯を

傳吉　姉貴、先刻話した、お前の身代。

兩人　何と申す。

傳吉　お前も以前の御亭主に、子までなしたる仲と聞き、どういふ事で生別れ。その御亭主も今では、出世してゐるとの事。その後お前はお主の若旦那が、敵討出立の、路用の爲に今の身の上。以前の亭主と緣は切れても、身を穢しては貞女とやらが立たぬといふお前を、いかに年季の内なればとて、外へやつて男を持たすと、親方の無得心。それが氣の毒ゆゑ、先刻の卷物を、買ひ手のあるを幸ひと、金につばめて親方への立て金。それもお前の苦界を助けて進ぜたさ。わしも惡い心でした事ではござらぬ。どうぞ堪忍して下さりませ。

くま　すりや、わしを思つて、親方さんへの立て金に

太平　大切なる一卷、人手に渡さばこの身は埋れ木。

くま　お主の爲に勤め奉公、わしが苦界は元より覺悟。この上は親方さんへ願うて、今の立て金取戻しそれで又ぞろ一卷を

太平　我が手に入れる手段が肝要。

くま　ちつとも早く親方さんへ

傳吉　話したとても、取り得ぬ時は

太平　汝が命、年度の生血。

ト抜きかける。おくま押へて

くま　モシ、兩用ともに私しに

傳吉　エ。

くま　サ、お任せなされて下さりませ。

ト唄になり、三人こなし。この仕組みよろしく、道具廻る。

本舞臺、正面杉戸、左右腰障子の附け屋體。爰に丈八、學山、文藏、お春、おやま、おいの、おしか。出羽長、京助、大鼓持ちにて、三味線箱を置き、酒肴を取散らし、奥二階の體。吉原雀の唄にて道具納まる。

いの　サアノ〳〵、お杯を流行らせませうぢやござりませぬか。

丈八　飲めや唄へや一寸先は闇雲に、築地の先生、一つ飲み給へ〳〵。

學山　これは有り難い。犬も歩けば棒に當るとはこの事だ。時に、岡村のお春ぼう、先刻の穴子はどうだ。

はる　ハイ。併し、今日の穴子は、少々むづかしうございます。

出羽　むづかしい〳〵。エヘン、爰に穴子の少々といふ者あり。

京助　ヤアハア、ボン〳〵。

文藏　エヽ、何を解らねえ事を。

やま　モシエ、出羽長さん、いつもの木琴の唄をおやりな。

黒次　アイ、お誂への蟹が來ました。

ト井へ蟹を入れ、持つてくる。

しか　オヤ、氣の利いた物を持つて來た。

いの　サア、おしかさん、わたしは蟹は手から先へ食ふワ。

出羽　かにて手くだとわしや食ひながら

文藏　テンツテン〳〵ツン。

ト井を叩く。

皆々　イヤ、音羽屋。

丈八　カウ、それはさうと、あのお杉ぼうは、どうしたらう。

やま　お杉さんは今、癪が痛いとて

學山　オイ、相方の癪の癒るまで、もつと藝者を呼んで騒ぐがいゝ。

はる　ほんに、藝者と云へば、先刻の奴さんは、どうでござりませう。

皆々　成る程、これは好い思ひ附きだ。

學山　オイ、若い衆、その奴を呼んで來て下せえ。

權七　畏まりました。オイ〳〵、奴さん、來なせえ〳〵。

ト合ひ方になり、友平、以前の形にて出て來り

友平　これは〳〵、どなた樣も、眞平お免し下さりませ。

女皆　ようござんしたな。

學山　幸ひ持ち合せた。一杯飲まッせえ。

丈八　これサ〳〵、其奴に杯をやられるものか。御報謝酒を飲ませるのはいゝが、なんぞ入れ物がある か。

友平　へイ、左樣な物は

丈八　無いといふなら飲ませぬばかり。薄穢ねえ、二階へ上げるも此方の情。サ、約束通り槍踊りを

友平　どう致しまして、此やうなお座敷で

學山　ならぬと云ふなら、薄穢ねえ、爰へ置く事はならねえ。早く歸れ〳〵。

友平　イヤモウ、私しが好んで參つた譯でもなし。歸れとならば、ドリヤお暇いたしませう。

丈八　コレ〳〵、待たつせえ。斯う見たところが、貴樣も腹からの物貰ひとも見えぬ。折角來て、只歸すも氣の毒。女郎の一人も呼んでやるから、一杯飲んで歸るがいゝ。

友平　有り難うござりますが、どう致しまして我れ〳〵風情が

丈八　ハテ、此方で買つてやるから、案じねえがいゝ。サア〳〵、一杯飲むがいゝ。

友平　イヤモ、男は當つて碎けろとやら。其やうに仰しやつて下さる事なら、一つ下さりませう。

女皆　ほんに、それがようござりませう。

はる　お酌はわたしが……奴さん、一つおあがり。

丈八　そんなら奴どの、一つ献さう。

權七　杯をお献しなさるは、どうやら穢ない

丈八　エ、、大事ない〳〵。萬事はおれが呑み込んでゐる……この人も腹からの物貰ひではあるまい。

落ちれば同じ谷川の水とやら。ナウ、奴どの。

友平　左様でございます。私しも親兄弟は、歴として居りましたれど、久しう逢ひませぬが、この身になつて、別れ〳〵に遍歴いたすも、何卒敵を……イヤサ、堅きお主に仕へました者なれど、身持ちが悪さに今の成行き。お話し申すも、面目がございませぬ。

丈八　いづれ若い身の上にはある習ひ。そんならこなたも色ゆゑか。

友平　どう致して、私しのやうな者が

學山　そんなら酒で身を賣つたか。

友平　マア、其やうなものでございます。

丈八　幸ひ持ち合せたこの杯。サ、一つ飲みやれ。

ト杯を足に挾み、友平の目先へスツト出す。

友平　有り難うございます。

ト取らうとして

モシ、旦那様、あなたは大分御酒が廻つたと見えます。こりや御座興でございませう。

丈八　イヽヤ、座興でない。

友平　そんならなんで臑にかけ

丈八　杯をくれるが、物貰ひには相應。有り難えと三拜して

文藏　杯を戴き、なみ〳〵ついで喰やアがれ。

友平　いかに落ちぶれたればとて、あまりと云へば

丈八　なんだ〳〵。その面はなんだ。うぬを爰に引出して

學山　酒の肴に弄りもの。

敵皆　こりやア好い慰みだ。ハヽヽヽヽヽ。

友平　チエヽ、さういふ事とは露知らず、多くの人の入込むゆゑ、もしや尋ぬる手がゝりにもと、身をへり下り來て見れば、思ひがけないこの場の仕儀。願ひあるこの身ゆゑ、じつと辛抱してゐればあまりの振舞ひ。

學山　身に願ひがあるとは、足を洗ふ元手を拵らへる氣か。

丈八　但しは二階をへちまつて、枕探しをする心か。

友平　アヽイヤ左様な

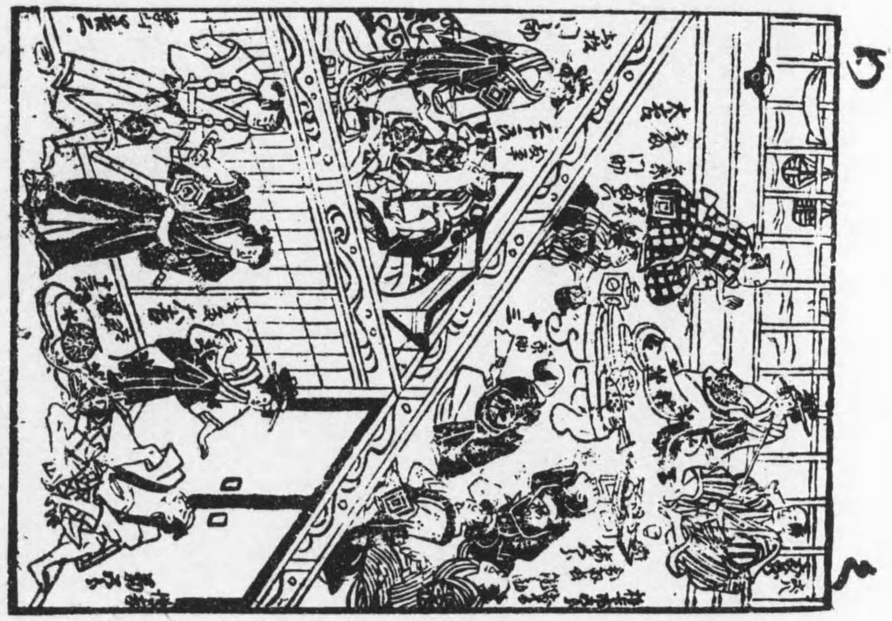
權七　さうでなくば、折角報謝に下さる杯。

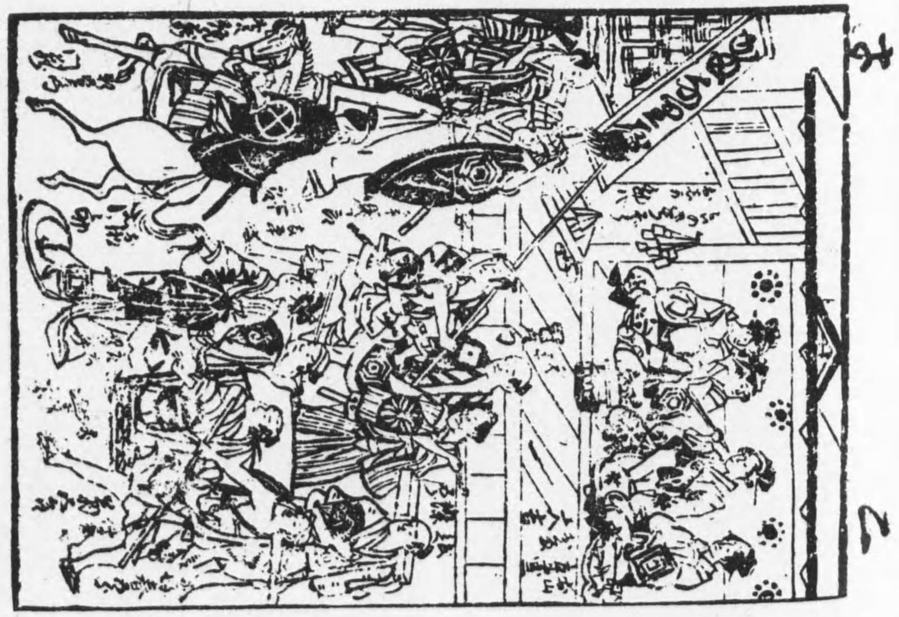
文藏　なんで素直に受けねえのだ。

友平　それぢやと申して
學山　枕探しか。
友平　サア、それは。
丈八　杯受けるか。
友平　サア
皆々　サア〳〵〳〵。

トこの時、奥よりお杉、酔ひたる思ひ入れにて、ツカ〳〵と出て、件の杯を取上げ

すぎ　イヤ、このお杯は主に代つて、わたしが貰ひませうわいなア。
はる　ヤア、お前は
女皆　お杉さん。
丈八　そんなら奴に成り代り。この杯を
すぎ　アイ、小鬚ながら、この奴さんは、わたしが色でござんすわいなア。
皆々　ヤア。
すぎ　最前より聞いてゐれば、大事の男を大勢よつて、何のかのと憎て口。憚りながら、主に構つて下





さんすな。

學山　ヤア、思ひがけねえ横合ひから、ハテ、人といふものは知れぬものだ。

すぎ　もう斯うなつたら隠すに及ばぬ。疾から云ひ約束したわたしの色。ナア、申し。

友平　いかにも、二世も三世も變るまいといふ深い仲。面目次第もござりませぬ。

皆々　ヤア〳〵〳〵。

友平　身にも應ぜぬ物貰ひが……御推量なされて下さりませ。

丈八　待て〳〵。どうも合點がゆかねえ。おぬしも釜鳴屋の鐵灸お杉、この一文奴と色事といふは呑み込めぬ。それには何ぞきつとした

すぎ　證據に立てる心中は

ト友平の脇差を抜き、指を切らうとする。

友平　ア、、コリヤ、滅多な事を。

ト支へるを振り切り、指をポンと切る。

皆々　これは。

すぎ　二世と變らぬ男へ心中、サ、これ取つて下さんせ。

ト渡す。

友平　オヽ、心底見えた。しつかりと受取つた。

ト件の指を敵役にひけらかし、思ひ入れ。

丈八　ハテ、物好きもあつたもの。そんならいよ〳〵、奴とお杉は

すぎ　斯うした深い仲ゆゑに、丈八さん、お前はどうも否でござんす。

ト丈八、寄らうとするを、振り放し、杯を打ちつけて

あのマア好かぬ顔わいなア。

丈八　こりやあんまり。

ト寄らうとするを、友平、お杉を引廻し

友平　女房ども、もつと此方へ寄つてゐやれ。

すぎ　斯うかいなア。

ト寄り添ふ。

丈八　エヽ、氣が揉める。いま〳〵しい。

すぎ　ほんに可愛い

はる　ドレ、お閉帳に致しませう。

ト屏風を引廻す。これにて丈八、立上がり、目を廻して倒れる。

皆々　ヤア、丈八さんが目を廻した。

學山　こいつは大變。奥へ連れて行つて、灸でもすゑるがいゝ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト皆々立ちかゝり、丈八を介抱して、捨ぜりふにて奥へ入る。あと合ひ方になり、屏風を開き

友平　さてハヤ、お前様、何からお禮を申さうやら、有り難うござります。私しも身に願ひあつて、尋ねるものがござりますゆゑ、斯様な人立ち多い所へ參り合せ、最前のやうに弄り物になり、口惜しうござりまするが、ヂツと蟄して居りますものを、恥面をかゝせられ、どうしてくれうと思ふ所へ、お前様がござつて、恥を雪いて下され、此やうな嬉しい事はござりませぬ。どういふ譯で私しを

すぎ　サア、毎日お前が門へお出での度、どうぞと思へど折が悪さに、云ひかねて居た念が屆いて、側へ寄つた嬉しさに、心中に切つたこの小指。

友平　勿體ない、どうしてマア。お前は歴としたお女郎様、わしは物貰ひ。ほんまに指を切らつしやる

筈もなし、さぞ跡が痛みませう。何ぞ藥でも、と云うたところが爰には無し

すぎ　イエ〳〵、必ず案じて下さりますな。お前ゆゑなら、どうなつたとて、大事ござんせぬ。

友平　これはしたり、どうして、見るかけもないわしへ、そりやァ御冗談だ。まづ一旦わしが顏を、立てゝ下さつたこの指、お前樣へお返し申します。外の男へやつて、喜ばすがようござります。ハイ、お大事の物を、有り難うござります。

ト以前の指を返す。

すぎ　そんならどうでも、この指は

友平　十分顏を立てゝ下された、この御恩は忘れませぬ。左樣なら私しは

ト立ちかゝる。

すぎ　モシ、わたしやこれ程に思うてゐるものを、なんで素氣なう

友平　エヽ、そんなら最前、時の間に合ひと思ひの外、ほんまにわしへ心中か。

すぎ　サア、嘘に此やうな事がならうかいなァ。

友平　ムウ。その志しは忝いが、わしは大切な願ひのある身。女に心をほだされては

すぎ　願ひある身と云はしやんすは、そんならお前は、お主の敵を、

友平　アヽコレ、滅多な事を。

すぎ　鬼の女房に鬼神とやら、術によつては、わたしも共々

友平　ムウ、忝いお前の深切。誠明石の浦なれば

すぎ　人には見えぬ、互ひの胸を

友平　云うたり聞いたり、あの小座敷で

すぎ　そんなら必ず

友平　お傾城樣。

すぎ　エ。

友平　ではない、女房ども。

すぎ　こちの人。

ト寄りそふ。

友平　ハテ、味に搦んだ

ト思ひ入れ。唄になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、元の座敷に戻る。角行燈をともし、最前新五左衞門の置いたる脇差あり。傳吉、おくま、思案のこなし。時の鐘、變つた合ひ方にて道具納まる。

傳吉　モシ、姉貴、あのやうに割ツつ口說いつ云ひましても、强情な親方、所詮金は返してはくれやすまい。こりやどうしたらようござりませう。

くま　大事な一卷、わしを思うての事ゆゑに、人手に渡し、あの品が無い時は、御主人樣の御難儀〜と云うて取戻すには金は戻らず、殊には先は知れず。これといふも、大事な品を、其方に預けたこの姉が、一生の誤まり。こりや何としたらよからうなァ。

傳吉　思案も工風も、賴みの綱が切れ果てた。姉貴、どうしたらようござらう。

くま　どうと云うて、わしが料簡にも及ばぬが、この上は是非がない。がんじがらみの今宵の手詰め。お主の難儀にや替へられぬ。不便ながらも

傳吉　エ。

くま　鬼になつて、オ〳〵、さうぢや。

ト思ひ入れ。時の鐘、誂らへの合ひ方になり、おくまあたり見廻し、敷いてある蒲團を裏返し、紙附きの方を表へ出し、よき所へ敷きかへ、傳吉に、あの上へ座れ、と顏で敎へる。傳吉、合點のゆかぬこなしにて、何心なく蒲團の上へ座る。此うちおくま、新五左衞門が置いて行つたる脇差を、有りあふ八寸へ載せ、傳吉が前へ置く。これにて傳吉、合點のゆかぬこなし。

傳吉　こりやァ先刻の侍ひが、忘れて行つた脇差。どうやら光りさうな、氣味の惡い。わしが前へ置いて、どうするのでござる。

くま　弟、その脇差で切腹しや。

傳吉　エ……モシ、姉貴、わしがなんで腹切るのでござる。

ト慄へてこなし。

くま　成る程、其方が驚き尤も至極。元わしは、尾花六郎右衞門さま、陸奥にお出でなさる時より、三代相恩の御主人。若氣の誤まりとはいひながら、若黨の才三郎といふ人と、この姉は密通なして、既に命にも及ぶべきを、御主人樣のお情にて、何氣なうお暇下され、その御主人の義理を思ひ、才三どのと飽かぬ離別。產み落したは女の子、里親へ遣はしたる、その親達も行くへ知れず、わしがいたづらもお構ひなく、其方の兄の友平も、尾花のお家に御奉公。この度親旦那の不慮の御最期。御次男の染五郎さま、敵討の出立に、路用乏しく、わしが身を賣りこの苦界、世間の人は心なく、男を持てよ嫁けよと、云はるゝ度にこの身の辛さ。それゆゑにこそ、末の弟の其方をば

不釣合ひなる亭主と、云はれる度にこの身の辛さ。これとても以前の夫へ立てる義理。今日思はず知神妙劍、御所持は正しく主人の惣領、お足をとめる其ために、預かり置きし一卷を、其方に預けしは姉が誤まり。右の一卷賣り代なし、わしが苦患を助けうと、思ふが却つて不忠の上塗り、サそれぢやによつて死んでたも。殊に其方は辰の年度揃ひし生れ、その生血で吉三郎さまの、金瘡御全快ある時は、それが其方の身の云ひ譯。わしは殘つて寶の詮議。さすれば兄友平が武士も立ち、親へ孝、お主へ忠義。玆の道理を聞分けて、コレ弟、潔う死んでたもいなう。

傳吉 成る程、お前の云はつしやる事、いろ〳〵聞分けました。さういふ譯なら、わしは死なねばならぬけれど、どうしてマア、その光る脇差で……モシ、外に仕樣はござりませぬかえ。

くま オヽ、道理ぢや〳〵。刃物を見るとその病。いつそわしが一思ひに。とはいへ、いかに忠義なればとて、これが手にかけられやうぞ……イヤサ、わが身も武士の胤ではないか。こゝな未練者めが。

傳吉 成る程なア。今でこそ此やうな身の上なれど、以前はわしも侍ひの子。見事に死んで見せませうさりながら、久しく逢はぬ兄の友平どのへ、お前逢うたら、わしは忠義ゆゑ死んだと云うて、褒めてもらうて下さりませ。

くま オヽ、よう云うた。わが身が忠義ゆゑ、死んだ事を、友平が聞きやつたら、さぞ羨やむであらう。わしでさへ嬉しいもの、忠義一圖の友平が、喜ばいでなんとせうぞいなう。

ト傳吉に涙を隱し、思ひ入れ。

傳吉 そんならわしは、もう死にます。モシ、姉御、跡のとひ弔ひを賴みます。

くま 氣遣ひしやるな、跡ねんごろに……南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト額を外けて思ひ入れ。傳吉、肌を脫ぎ、脇差を怖々拔き、手拭に卷き、突き立てようとして、恟りして前へ置く。おくま、この體を見て、目顏で思ひ入れ。傳吉、また取上げ、突きにかゝり、突かれぬこなしよろしくあつて、トヾ脇差を投げ出し

傳吉 こりやモウどうもいけませぬ。

ト逃げ出すを、おくま、うろたへ留めて

くま コレ、聞分けのない弟、その愚ゆゑ今日の難儀。死んで忠義を立てゝくれ。コレ、拜む〳〵、拜むわいなう。

傳吉 わしも拜む。助けて下さい〳〵。

くま 得心なければ是非に及ばぬ。不便ながらも、姉が手にかけ、お主へ忠義。

傳吉　モシ、どうぞ命を

くま　今さら未練な。

ト捕へようとする。傳吉、逃げ廻る。この立廻りのはずみ、思はず行燈を蹴返す。時の鐘、暗き思ひ入れ。この時、奥より太平、窺ひ出て、立廻りの中へ入り、傳吉を一かせ切る。これにて「アッ」と苦しみ、思ひ入れ。おくま、我が手にかけしと心得

弟、免してくれ。南無阿彌陀佛。

ト切りつける。立廻りのうち、奥より新五左衞門、行燈を提げ、窺ひ出て、この體を見て

新五　ヤア、おくまは亭主を殺した。亭主殺しだ〳〵。

くま　アヽコレ。

ト制するはずみ、新五左衞門に薄手を負はす。

新五　ワア、人殺し〳〵。

ト云ひながら、二階の上がり口へ逃げて入る。この時おくま、太平、顔見合せ

くま　ヤ、あなたは。

太平　そんならいよ〳〵

ト傳吉を見て思ひ入れ。この時、權七出て

權七　女め、うぬを

トかゝるを振り切る。太平、權七を引附ける。この途端に以前の狀を落す。おくま、こなしあつて

くま　一卷失ふ申し譯、姉が手にかけ、まッこの通り。年度揃ひし弟が血汐。

太平　出かしたおくま。この一藥へ調じ合せて

權七　何がなんと。

トかゝるを當てる。此うちおくま、有りあふ器を取つて

くま　イザ、お藥を。

太平　オヽ、心得た。

ト右の血汐を器に受け、藥を入れて服む。此うち傳吉、手負ひのこなし。

傳吉　とても生きる事はなりませぬが、せめてお主の病を助ける

くま　オヽ、その良藥は、こなたの生血。

傳吉　お役に立ちましたか。

太平　今ぞ本復。

くま　大死ならぬ弟が忠義。
傳吉　嬉しやそれで心よう、あの世へ行きます。
くま　さはさりながら
太平　先刻の一卷。
くま　詮議はわたしが
　　ト此の時、所々にて
大勢　人殺しだ〳〵〳〵。
　　ト早拍子木を打つ。
太平　ヤヽ、あの聲は。
くま　大事の御身、必ずともに。
太平　萬事は重ねて
くま　この間に早う。
太平　心得た。
　　ト階子の口へ行かうとする。下にて人音するゆゑ、上手の方へ走り入る。始終拍子木、アリヤ〳〵の

聲。おくま、ウロ〳〵する。此うち黒四天の捕り手四人、十手を振つて出て來り、おくまを見て
捕手　人殺しのおくま、捕つた。
　　トかゝるを、おくま、件の血刀を取つて切り拂ふ立廻り。ちよつとあつて、四人は奥へ逃げて入る。
　　跡おくま、息の切れし思ひ入れ。あたりの銚子を取り、飲んで、思はず太平が落せし一通を取上げ
くま　「島川太平どの、海老名軍藏」。
　　ト此うち後へお杉友平、出かゝり居て
兩人　ヤヽ、その宛名は。
　　ト側へ寄る。おくま、捕り手と心得、ちよつと立廻つて、顔見合せ
友平　ヤ、姉者人か。
くま　其方は友平。
すぎ　そんならお前は
　　トこの聲に傳吉、心附き
傳吉　ナニ、友平どのか。
　　ト立たうとして撞となる。

すぎ　ヤヽ、手負ひのお前は

友平　弟の傳吉。何ゆゑに、この體は。

傳吉　これもお主へ忠義の一つ。して又今の一通は。

くま　慥かに御主人吉三郎さま。

友平　ヤヽ、若旦那が、どうして爰へ。

くま　しかも一卷御所持の上、見覺えのある兩腰は、二つ銀杏の紋ぢらし。

友平　して、その者の恰好は。

くま　肥り肉にて脊高く、二の腕かけて刀疵。

友平　ヤヽ、それぞ正しく島川太平。

三人　ヤ、なんと。

友平　合點ゆかぬは神妙劍を、どうして彼れが所持せしか。まつた帶せし二腰は、大旦那を殺害なした
る折柄に、奪ひ取つたるその大小。

くま　エヽ、割り符の合ひし事ゆゑに、吉三郎さまと思うたは

すぎ　現在お主の敵と知らで

傳吉　年度の血汐をお役に立てんと、この身を捨てゝ金瘡の
くま　惱みを助けん其ために
友平　弟が命を
皆々　ホヽホイ。
ト思ひ入れ。この時、後へ學山、權七、窺ひ出て
二人　人殺し、うぬを。
トかゝる。友平、お杉、二人を引敷く。爰へ以前の捕り手出て
捕手　おくま、捕つた。
ト立ちかゝる。おくま、フツと行燈を吹き消す。お杉は學山、友平は權七を見事に投げのける。傳吉
がつくり落ち入る。双方よろしく、ひやうし

幕

（作者　鶴屋南北）

三幕目

湯島社内の場

役割――三吉おぢい土左衛門。水茶屋おたか實ハ腰元おさゞ。鷺の首太左衛門。道具屋與七。衣裳屋文藏。富岡屋廻し男、嘉助。八百久下女。おいち、手習ひ弟子、虎松。同、德藏。丁稚、三太。八百久後家、お竹。小間物屋娘、おせん。絲屋娘、おきぬ。八百久手代、丈八。富岡屋吉助。若黨、阿部丈助實ハ駕籠舁き彌作。八百屋娘、お七。

本舞臺、三間の間、向う餘程引下げて白壁。湯島天神宮の横手、これより少し離れて、廻り石の玉垣この内に石燈籠、狛犬。上の方、葭簀張りにて、よき所簾を掛け、長床几を並べて、坂の通り口の邊水茶屋のかゝりよろしく、爰に仕出し三四人、遠眼鏡を見てゐる。おさゞ、やつし前垂れ、掛け茶屋女の拵らへにて、茶を運びゐる。辻打ち、鰐口の音にて幕明く。

仕出　ヤレ〳〵、今日は天氣がよくて、晴れてゐるせゐか、誠によく見える。面白い、サア〳〵、見さつしやい。

同　コレ〳〵、眼の下から向うまで、ゴチャ〳〵、人の頭のやうな物が、一面に見えるは、こりやア

何だらう〳〵。

同　それ〳〵、見える段ではない。そして、北も南も、向うまで美しく赤くなつてゐるやうだ。

同　成る程、その通り、違ひない〳〵。

同　どこもかしこもギッチリ、人の頭のやうに見えるものは

同　見える物は、なんだ〳〵。

同　それ見やれ、矢ッ張り人樣の頭だ。

皆々　ハヽヽヽヽヽ。

ト笑ふ。辻打ち、揚弓の音にて、向うより吉助、羽織着流しの形にて出て來り、跡より嘉助、やつし尻端折り、羽織を帶へ挾み、廻し男の拵らへにて、供をして出て來り、これに森田屋の頭巾をかぶり顏を隱したる非人、腰をかゞめ、手の内を乞ふ體にて、附いて出てくる。これより少し下がりて與七前幕の形にて附いて出てくる。舞臺へ來る時分、非人はウソ〳〵と上の方へ入る。與七、吉助を見て思ひ入れあつて

與七　モシ〳〵、富岡屋の親方ぢやアござりませぬか。

ト嘉助見て

嘉助　オヽ、道具屋の與七さまではござりませぬか。
吉助　ヤレ〳〵、この間はお遠々しく、足まめで、儲け口でお忙がしいな。
與七　イエ、モシ、今日は爰に掛合ひ事がござりまして、これから直ぐに深川の本宅へ、わざ〳〵參るつもりでござりました。
吉助　オヽ、それは幸ひ。
　ト云ひながら床几へかける。
さご　これは與七さん、ようお出でなされました。どなたも此方へおかけなされまし。
　ト茶盆を差出す。
與七　アイ〳〵。コレ、おさごさん、お前の頼みの一件も、今日は荒まし取極めやせう。
さご　それは有り難うござります。是非々々お前さん、お頼み申しますわいな。
仕出　イヤ、わしは橋場の開帳へ廻つて行かにやァならねえ。
皆々　こりやァ姐さん、お世話でござりました。
さご　マア、御ゆるりとなされませ……左樣なら
　ト仕出しは茶代を置いて、花道と下座へ別れて入る。

吉助　モシ〳〵、與七さん、なんぞ好い掘出し物でもござりますか。
與七　なにサ、さうでもないが、わしもよんどころなく頼まれた事について、お前と御相談があるが、甚だ入組んだ筋合ひサ。
吉助　時に與七さん、その用向きは何ぢやな。
與七　イエサ、外の事でもござりませぬが、この茶屋のあの子の事でござりますが、それについては、お聞きなされ。いつぞや私しが、さる人から買ひうけた品がありますが、それをあの子が聞き出して、是非々々賣つてくれろとの事。さりながら、代金の事、當と云つても無い事ゆゑ、どうぞ藝者に出たいと、この間中からわしへ切の頼み。その入用の金高は、七十兩でござりますが、なんとお前、相談してやつては下さりますまいか。
吉助　そりやハヤ、外の事ではなし、お前の口入れの事なり、わしも有やうは奉公人を欲しいと思ふ所殊に見たところが、年恰好といひ、あれなら隨分相談して進ぜませうわい。ナウ、嘉助。
嘉助　左樣でござりまする、恰好といひ、面もよし、勤め盛りでござります。そんなら金高、七十兩でござりますかい。
與七　アイサ、いよ〳〵お前の方へ決着すれば、わしが方の代物は、直ぐに當人へ、その金高で賣り渡

す應對。尤も元金は、わしが五十兩で買つた代物を、ならうなら百兩にも仕やうと思つたが、云はゞ口の遠い代物。それゆゑ二十兩の利を附けて、あの子の方へ賣り拂ふつもりに掛合ひをしましたのサ。

ト おさご、思ひ入れあつて吉助の側へ寄り

さご これはあなた、お初にお目にかゝりましてござりまする。何か不束にはござりまするが、只今もお聞きなさる通り、是非入用の金子でござりますゆゑ、何かの事は、あの道具屋の與七さんに、お頼み申しましてござりまするが、どうぞ成りませうなら、あなた、よろしいやうに御相談なされて下さりませ。お頼み申しますわいな。

吉助 アイ〳〵、承知しました。何か又、詳しい事は、この與七さまへ掛合うて置かうてや。

さご ハイ〳〵、よろしうお頼み申しますわいな。

嘉助 モシ〳〵、親方、爰でお取極めも出來ますまい。あの太夫元の傳五郎さまの、國衆の内でも借りませう。

吉助 オヽ、それがよからうか。コレ〳〵、ひよつと跡から、あの多十が來まいものでもない。なんと嘉助、こなた、爰にちつとの間待ち合してくれぬか。

嘉助 ハイ〳〵、畏まりました。左樣いたしませう。

與七 モシ、富岡屋さん、なんと、一杯あがりませ。

吉助 イカサマ、相談ながら、マア、ござりませ。

さご 左樣なら、お歸りにお寄りなされませ。與七さま、お頼み申しますぞえ。

與七 アイ〳〵、承知々々。

吉助 そんなら行てくるぞや。

ト流行り唄、大拍子になり、吉助先に與七、下座へ入る。矢張り、今の鳴り物にて、向うより花見の手習ひ子大勢、これに虎松、徳藏も交り、他所行きの形、頭へ造り花の梅を差し、揃ひの手拭を襟へ卷き、藤倉草履にて出て來り、跡よりおせん、おきぬ、いづれも着流し、娘の形。お七、同じく頭へ造り花の梅を差し、出てくる。おいち、下女の形にて青傘をさしかけ、天神廻りの模樣。餘程跡より土左衛門、老けたる拵らへ、屋敷の法被を引ッかけ、生酔ひの思ひ入れにて出てくる。文藏、衣裳屋にて、若い者、衣裳の葛籠を脊負ひ、附添ひ、この人數よろしく出て來り

土左 アヽ、こりやア新造の揃ひだな。イヤア、綺麗々々。イヤ、瀧野屋ア。畜生め。

ト ひよろ〳〵する。

これナ〳〵、何もそんなにおッかながる事はねえ。何かえ、今日は師匠様の花見だの。わつちも一緒に天神廻りを

ト花道のうち、此せりふを云ひながら附いてくる。女形皆々、怖がる思ひ入れ。お七、土左衛門と入れ替り、皆々足早に舞臺へ來る。おさご、お七を見て

さご　オヽ、こりやお七さん、早う支度が出來てぢやな。

ト お七、思ひ入れあつて

しち　おさごさん、おゆるしえ。

女皆　そりや來たぞえ。

ト皆々上の方の葭簀張りへ、バラ〳〵と片寄る。お七、下の床几へ腰をかける。おさご、思ひ入れあつて

さご　エヽ、なんぢや、お前方、恟りしたわいな。

せん　それぢやというて、あの人が道々も、いろ〳〵な事云うてぢやわいな。

徳藏　ありや大方お前方に、氣があるのだも知れない。おへねえ助平な奴だ。

虎松　ほんに、ありやア狂人かも知れない。

きぬ　ありやア狂人かいなう。をかしな形をして怖いわいなう。ほんにおッかないよ。今もわたしが側へ來たよ。

せん　そんな事をお云ひでないよ。いつそ酒の勾ひがしたから、ありやア生醉ひだよ。

しち　これはしたり、おせんさん、お前までが同じやうに、默つて居やしやんせいなア。

いち　左樣でござりまする。もしひよつとした事でもござりますと、大抵迷惑な事ではござりませぬ。

早う御別當樣へお出でなされませ。

しち　それがよいわいな。サア皆さん、來やしやんせ。

ト此うち土左衛門、ひよろ〳〵しながら舞臺へ來り、あたりを見廻し、よき所の床几へ腰をかける。この時女形皆々立たうとするを、土左衛門、ツカ〳〵と寄つて、上の方へ立ちふさがり、

土左　アイ〳〵、行きやす〳〵。爰まで送つて來たものを、行かねえでどうするものか。御別當樣へでもどこへでも、一緒に附いて行かにやア男が立たねえ。サア、その姐さんは、おれが手を引いて行きやせう〳〵。

ト お七の側へ寄らうとする。此うち文藏、土左衛門を支へて

文藏　これサ〳〵、どうしたものだ。みんな年のいかない女達だ。そんな事を云ふと怖がるわな。大人

氣ねえ、よしにさつしやいな。

土左　なぜ〳〵、女達ばかりで危ねえによつて、おれが連れて行つてやるのだ。それが、ド、ド、どうした。

文藏　ハテサテ、マア、いゝと云ふに。

トいろ〳〵なだめる。

嘉助　ハア、今日はこの天神様に、席書があると聞いたが、その子供衆だな。次手にわしも席書を見て行かうかい。

土左　なんだ、席書だ。コレ、其方が席書なら、おらア又當て書といふものをするわい。コレ〳〵、姐さん達、お前方に教へてあけやせう。

女皆　エヽ、なんの、其やうな事は知らぬわいなア。

トお七皆々の袖を引き、行かうといふ思ひ入れ。

土左　サア、それだから教へてやらうといふのだ。マア、おれがする通りに

ト寄らうとするを、文藏とめて、

文藏　これはしたり、しつこい。もう好い加減にさつしやれな。

土左　なんだ〳〵、無性矢鱈におれをおツかじめるが、てめえ、この女の供か。

文藏　イヽヤ、供ぢやねえ。

土左　そんなら連れだといふのか。

文藏　イヽヤ、連れでもねえのサ。

土左　なんの事だ。そんなら彌次馬だな。おきやアがれ。ムウ、見りやア荷背負ひのやうな者を連れて居るが、ハヽア、驩り呉服だな。

文藏　これサ、おらアこの土地へ來る衣裳屋だよ。

土左　なんだ、衣裳屋だ。コレ、貴様は衣裳屋か。そいつは面白い。おれもこの間は工面が悪くつて、こんな態だ。二三枚借りべいワ。コレ、なんぞ値打のある物をさらけ出して貸してやれ。

文藏　エヽ、イケ大層な横を云はしやんな。そんな事は流行らねえワ。馬鹿な面な。

土左　コレエヽ、貸されずば貸されねえと吐かしやアがれ、馬鹿な面とは、なんの事だえ。あんまり威張るなえ。腕づくて借りるぞ。さう思やアがれ。三吉土左衛門とはおれが事だワ。

ト土左衛門、鉢巻をして立ちかゝる。嘉助、この中へ入つて

嘉助　とんだ交ぜッ返しだ。コレ〳〵、外聞が悪いワ。料簡さつしやい〳〵。

土左　否だ〳〵。悪いと合點しねえぞ。うぬら、どうするか見やァがれ。

ト嘉助を突きのけ、文藏へ打つてかゝる。皆々捨ぜりふにて掛合ひになる。此うち辻打ちになり、向うよりお竹、八百屋の後家の拵らへにて、青傘をさし、跡より丈八、着附け羽織、小さき風呂敷包みを持つて出て來り、舞臺の方を見て

たけ　いかう人ごみゆゑ、何ぢややら間違ひが出來たさうなわいの。

丈八　左樣でござる。大方通りかゝりのごたつきでがなござりませう。氣をお附けなされませ。

ト云ひ〳〵、兩人舞臺へ來り

たけ　オ、、アレ〳〵、娘のお七が居やるが、エ、、危ないに、早う別當樣へ行きやればいゝ。

丈八　ほんにお七さん、コレ〳〵、怪我でもしてはなりませぬぞえ。それに下女のおいちどんも、まゞついて居る樣子だが、もしやお七さんについての事ではないか。

たけ　アレ〳〵、丈八、とめやいの〳〵。

丈八　ハイ〳〵……これサ〳〵、爰は往來だ。マア、靜かにしなさい〳〵。

ト丈八お竹、ごたつきの中へ入りとめる。揚弓の音。

土左　イ、ヤ、靜かにやァしねえ。おらァ醉やァしねえぞ。否だ〳〵。

丈八　ハテサテ、其やうな事ばかり云つて解るものではない。マア、落ちついて、とつくりと譯を云はつしやい。

土左　なんだ、しつかり酒で鰯鮪。そんな物が食はれるものかえ。コレエ、、譯をいつたら、高が斯うだ。あの娘におれが、一緒に行つてやらうと云ふを、彼奴等が兎や角と吐かすから

ト此うちお竹、土左衞門を、よく〳〵見て

たけ　ヤァ、誰れかと思うたら、お前は土左衞門どのぢや。

土左　さういふのは、八百屋の後家御か。

丈八　ハァ、この人は阿母さん、お前、お近附きの人でござりますかえ。

たけ　おいなう。コレ〳〵、さうしてあの娘お七を、どうしたと云はんすのぢや。

土左　ハァ、そんならこなたの娘の、アノ評判のお七といふのは、この娘の事か。こいつは飛んだ話しだ。

ト お竹は文藏と嘉助に向ひ

たけ　マア〳〵、何ぢややら譯は知りませぬが、こりやわたしらが挨拶しませう。お前方も不承して下さりませ。

嘉助　なにサ、わたしは爰に居合した者ぢやが、女ばかりの事ゆゑ、見かねて裁人に入つたのサ。

文藏　わしも云ひたくはないが、あんまり横を云つて引ッ搦むからの事。お前方の挨拶なら、此方はどうでもようござります。

嘉助　それ〳〵、これ限りに濟みさへすりや、何も云ひ分はごんせぬ。

たけ　ハイ〳〵、それは御苦勞にござりまする。コレ〳〵、土左衞門さん、ぬし方もあの通りぢや。外聞の惡い、お前もちと嗜んだがよいわいの。

ト お竹、土左衞門、下の方の床几へ腰をかける。

さご　これは八百屋の御内儀さん、今日はようお詣りなされました。

たけ　アイ〳〵、こりや何かと、いかいお世話になりました。

しち　母さん、お前、直に跡からござんすと思うたに、いかう隙がいつてぢやわいな。

せん　おばさんがござんせぬゆゑ、ナア、おきぬさん。

きぬ　それいな、わたしらばかりぢやと思うてナ、いろ〳〵な事云うて、怖うて〳〵ならなんだわいな。

いち　イエモウ、お知り人とは存じませず。私しはモウ、どう致さうかと、大抵心遣ひした事ぢやござりませぬわいな。

ト 皆々よろしく入れ替つて床几にかける。おさご、丸盆へ茶碗を大分のせ持ち來り

さご　サア〳〵、どなたも、お茶一つおあがりなされませいな。

ト かい〴〵しく差出す。

土左　そんならアノ爰へ、松竹梅といふ繪馬を上げた、お七といふのはあの娘か。成る程、美しい代物だ。

たけ　モシ、聞いて下さんせ。その繪馬は、この子が十一の年の書初めなれど、今度何やら願ひがあつて、書き直して上げたいと云ふゆゑ、幸ひ今日の席書、お宮の繪馬を下ろすつもりでござんすわいな。

さご　申し、お内儀さん、その繪馬の事は、この間もお七さんがさう云うてぢやゆゑ、下げさせて置きました。コレ〳〵、見なさんせ、この通りお預かり申して置きましたわいなア。

ト 片脇より松竹梅と書きし古き繪馬を取り出す。お竹取つて

たけ　これ見やれ、まだ何ともないもせぬに、張り直すとは、ほんに費な事ではあるわいの。

丈八　左やうサ。美しう好う見事に出來たを、惜しいものでござります。

しち　それぢやというて、今に思へば、此やうな額を上げて置くは、恥かしうござんすゆゑ、どうぞ文字を書き直して、上げたうござんすわいなァ。

丈八　ハァ、それなれば、よもや今度は松竹梅ではあるまい。定めし外の文字であらう。モシ、お七さん、何といふ字でござりますえ。

しち　今度は願ひがあつて、只一字、「戀」といふ字を書いて上げるわいなァ。

丈八　コレ〳〵、お七さん、お前、願ひがあると、アノ「戀」といふ字を書いて上げるえ。アノ「戀」といふ字を……ハテ、戀は思案のイヤ外でもあるまい。大方それも日頃から、この丈八が。イヤサ、丈八への戀といふ字・成る程・これは思ひつきでござります。

ト一人して嬉しき思ひ入れ。

土左　ウム、そんならアノ、この丈八とやらに戀といふ字か。ハテ、戀は思案の外だなァ。

しち　なんのマァ、誰れがアノ丈八と、

ト云はうとするを、お竹、ムツとして

たけ　イヤ、なんぼ思案の外でも、コレ丈八、おぬし、そりやあんまりであらうがの。コレ、氣の多いも程があるわいの、現在わしが見る前で、又お七も小娘の癖に、其やうな浮氣な文字は、モウモウ、決して書かす事はなりませぬ。オヽ、この母が書かさぬわいなァ。

ト腹立つて悋氣の思ひ入れ。

いち　ァヽ、申し、おかみさん、そりやモウ丈八どのが、何と云はんせうが、お七さんに其やうな、みだらな事の無い事は、私しがよう存じて居りまする。折角日頃からのお願ひ通り、矢張りお七さんの仰しやる通りになされて遣はさるゝが、よろしうござりませうわいなァ。

丈八　それ〳〵、私しも成る程よい字だと思ふゆゑ、感心いたしてツイうか〳〵と、留めましたのでござりまする。必ず惡う思はずと、お七さんの詞を立て、その「戀」とやらいふ字を、お書かせなさるが、よからうと存じまする。

ト此うちお七、額の「松竹梅」を、友達の女手傳うて、大剝がしに剝がし、片脇へ置く。土左衛門、これを見て

土左　ァヽ、氣の早い、いつの間にかちよつくり額を剝がしたの。

ト「松竹梅」の剝がしを取つて

これ見たがいゝ。十一の書初めにしちやァ、餘ッぽど好く出來たものを、あんまり惜しいものだこりやァおれが貰つて置かうよ。

ト額の剝がしを疊んで懐へ入れ、思ひ入れあつて
時に、お竹さん、幸ひこなたに折入つて、ちよつと話したい事があるが、アヽコレ、どうも爰では

ト お竹、思ひ入れあつて

たけ　エヽ、久しいものだ。お前の用といふは、聞かいでも大概知れてある。大方また無心でござんせう。アヽ、困つたものぢや。

ト云ひながら、鏡袋より二分金を出して紙に包み

もう、誠にこれきりでござんす、重ねてからはお斷り申しますぞえ。

ト差出す。土左衛門これを取り、思ひ入れあつて

土左　イヤ〳〵、おれがこなたに用といふは、無心ぢやアねえ。ちつと内證で話しがあるが、他聞があつては云ひ憎い。それにしても、こりやア折角のお志しだ。有り難い。返されもしねえ。マア、小遣ひにありついたといふものだ。

ト 櫓はずに箕入れの中へ入れる。

丈八　ウム、噂に聞き及んだ程あつて、ハテ、如才のない代物だ。

ト此うち後へ、最前の頭巾をかむりし物貰ひ出かゝり、あちこち窺ひ居て、この時お竹が側へ置さし紙入れを浚ひ、一散に向うへ逃げて入る。

たけ　オヽ、わしが紙入れを持つて行つたわいなア。

丈八　ソレ、泥坊ぢや、泥坊々〳〵。

ト矢張り揚弓の音、辻打ちの合ひ方にて、丈八うろたへ、跡追うて花道へ入る。

嘉助　イヤハヤ、書中に呆れたものだ。こりや物騒だ、油斷はならぬわい。

文藏　油斷がならぬといへば、わしも芝居の衣裳を抱へて、うつかりしちやア居られない。

土左　なんだ、彼奴は荒稼ぎか。誠に生馬の眼を抜きやアがつた。

ト呆れた思ひ入れ。

虎松　おせんさん、おいらは先へ行かうかい。

せん　待ちなさんせ、今に一緒に行くわいなア。

きぬ　それぢやというて、この子達も待ち遠で。

しち　ほんに、もうお席書も始まつたでござんせう。そんなら母さん、わたしや皆さんと連れ立つて行くほどに、お前は跡からござんせいな。

たけ　オヽ、それがよい。そんならおいち、わがみ附いて行きやいの、

いち　ハイ〳〵、畏まりました。

さご　お席書が始まるなら、わたしも行つて見物したいものぢやわいな。

たけ　コレ〳〵、おさごさん、見世にはわたしが居る程に、行くなら早う行て來やんせ。

さご　ハイ〳〵そんなら、お頼み申しますぞえ。

嘉助　ドレ、おいらもちよつと覗いて見ようか。

しち　サア皆さん、行かうわいなァ。

ト辻打ちになり、お七先に女形殘らず、これに子役とおいち、おさご、跡より文藏に、若い者、葛籠を呑負ひ、嘉助附いて下座の方へ入る。あと揚弓の音。お竹、土左衛門殘り、思ひ入れあつて

土左　コレ、お竹さん、どういふ話しといつて、外ぢやァねえ。以前こなたが育てゝくれた、甥のあの島川太平が事だが、あれが身の上について、手に入れたいは神妙劍といふ一卷。それさへあれば、今にも直ぐに五百石といふ知行取り。さうなつた日には、まづこなたには、以前世話になつた恩返し、直ぐに引取つて御隱居樣。又、斯ういふおれは、現在伯父の事ゆゑ、こんな態ぢやァ居ねえ。今日の濫樓も明日の錦、立身出世。ところで、その望む一卷、その持ち主も知れちやァ居る

が、何を云ふにも今では、道具屋の手へ渡つたゆゑ、金が無くつちやァさつぱり解らねえ話しだて。

たけ　これいなァ、その一卷とやらは、いつぞやあの太平さんの手へ入つたといふ事ぢやござんせぬかいなァ。

土左　サア、聞いて下さい。高くは云はれねえが、島川太平がぶッ放して立退いた、磯貝實右衛門めがの奥州に居た時、その惣領の吉三郎といふ奴が、神妙劍の一卷を持つて、武者修行に出たとの事。ところが、太左衛門といふ者が、いつぞや木更津の船の乘合ひの中で、外の旅の武士が、女にじやらついてゐる奴があるを幸ひに、ちよろまかした荷の中に、こんな物があつたといふから、見ればその一卷ゆゑ、直ぐに甥の太平へ渡させたが、して見りやァその時船の中で、乘合ひの女に迷つて、荷物を盜まれた侍ひは、吉三郎に違ひはあるまいといふ事だが、そりやァさうと、聞かつしやい、執心のその一卷は、いつぞやひよんな間違ひで、人手へ渡つたけな。併し、道具屋が持つてゐる事ゆゑ、金さへありやァ今にでも、直さま解る話しサ。

たけ　そりやモウ、さういふ事なら、此方で金の才覺、しまいものでもなけれど、して、どの位な事でござります。

土左　その金は、大概七十兩サ。

たけ　イカサマ、七十兩というては、いはゝ大枚の事なれど、なんと云つても、あの太平さんを知行取りにすれば、成る程、わたしは好い隱居樣だ。それにしても、あの娘のお七は、ありやわたしが實の娘ではござんせぬ。一體、里に取つて養育した、わたしは里親、預けた者も女親で、十六年以前の事、今以てお七には隱して居れど、あの子を連れて八百屋の内へ、後妻に入つたわたし。もうあのお七も時分が來たによつて、相應な人に授けて、どうぞコレ、急に金にしたいものでござんす。

土左　ムウ、そりや貴樣さへその心なら、何も理屈はねえ。早い事はあのお七を、バッタリと賣らうものなら、忽ち七十や百の金は出來るが、なんとその方が、手短ではあるまいか。

たけ　そりやモウ、百兩にもなる事なら、それがいつち好い料簡、早うその相談になりたいものでござんす。

ト早めたる大拍子になり、向うより丈八、右の物貰ひを引ッ捕へ出て來り

丈八　うぬ、いけッ太い奴ぢやァねえか。この丈八が附いてゐるに、うぬらに好い事をされてたまるものか。サァ、盜人め、紙入れを出しをれ〳〵。

ト云ひ〳〵舞臺へ引摺つてくる。

たけ　オヽ、丈八、今の盜人を、捕へたか〳〵。

丈八　こんなヨイ〳〵を逃がしていゝものでござりますか。うぬ、どうするものか、見やァがれ〳〵。

ト こづき廻す。この時物貰ひ、右の鏡袋を投げ出す。お竹見て

たけ　コレ〳〵、紙入れを出しをつたわいの〳〵。

ト鏡袋を取上げる。

丈八　ソレ、見をれ、うぬがやうな奴は、以後の懲らしめ、斯うしてやるワ〳〵。

ト物貰ひをぶちのめす。

土左　それがいゝ〳〵。思ふさまぶつてやれ〳〵。おれも相伴しようワ。

ト出茶屋の薪ざつばを取つて立ちかゝる。

たけ　ほんに太い奴ぢや、女子ぢやと思うたら當が違ふぞ。こんな奴は、コレ、この草履が相應ぢや。これで存分に、斯うしてやるワ。

ト お竹、穿いてゐる草履を持つてくらはす。物貰ひ、この草履を引ッたくる。土左衞門お竹、又ぶちにかゝる。この時、後へ吉助、出かゝり、この中へ入り

吉助　コレ〳〵、もうようござる〳〵。料簡さつしやれ〳〵。

ト留める。

皆々　なにサ、こんな奴は、思ふさまぶちのめすがいゝ。

吉助　ハテサテ、さうではあらうが、盗まれた品さへ恙なく戻つたら、もう料簡さつしやるがよいぞや

ト三人を留めるうち、物貰ひ、右の草履の片々を持つたるまゝ、下座へ逃げて入る。

吉助　イヤハヤ、畫中に油斷も透もなる事ではござりませぬ。併し、怪我でもさつしやらぬが、見附け物でござります。

たけ　ハイ〳〵、こりやアどなたやら存じませぬが、大きにお世話様でござりました。して、お前様はどちらのお方でござりますぞいな。

吉助　ヘイ、わしは仲町の子供屋でござりますが、この邊へ奉公人の事で、參つた者でござります。

ト これを聞いて土左衛門、お竹の袖を引いて、思ひ入れあつて

土左　コレ〳〵、持つてこいといふ所だ。あの娘の事を、そこへ話すがいゝ〳〵。

たけ　ほんに、それ〳〵、イヤモシ、お前とは近附きではござりませぬが、承れば、その御商賣では、ちと急に折入つて、お頼み申したい事がござりますが、まさか爰ではお話し申すも

ト思ひ入れ。

土左　そんなら斯うするがいゝ。裏門の高階屋へでも行つて、とつくりと相談するがようごんす。

吉助　ハア、商賣體の事と云はつしやるは、定めし奉公人の事でござりませうな。

土左　左やうサ。隨分玉は云ひ分無しで、親判の奉公人だから、氣遣ひがないのサ。

丈八　モシ〳〵、親判の奉公人の相談とはえ。

たけ　アヽ、コレ〳〵、それについても、其方にいろ〳〵話しがあるが……そんなら斯うして下さんせ

わしや跡から行く程に、土左衛門さん、お前、ぬしを先へ連れて立つて行つて下さりませ。

土左　オイ〳〵、合點だ。委細はわしが、とつくりと掛合ひませう。

吉助　わしも今云ふ通り、外に掛合ひもあるが、いづれ玉を見た上、早い方へ相談しませう。

たけ　必ずお頼み申します。

土左　サア、親方、歩きなさい。

ト辻打ちになり、吉助先に土左衛門附いて、下座へ入る。

たけ　コレ丈八、マア、爰へ來てたもいなう。

ト合ひ方になり、丈八、お竹の側へ行き、床几へ腰を掛け

丈八　イヤモシ、先刻にからの樣子、今のは慥かに深川の、子供屋と見えますが、合點のゆかぬ、どういふお話しでござります。

たけ　さればいの。それについては、こなさんにも相談せにやならぬが、わしが以前乳をあげた、お屋敷の若旦那、今度主取りをさつしやるといひ、殊更高祿に取附くについては、求めねばならぬ品があつて、七十兩といふ金の談合。それにつき、調へば直ぐに立身出世。さすればわしも御隱居樣と仰がれる身になる、それからの思ひつき。あの娘のお七を、深川へバツタリに、七十兩に賣り渡し、若旦那のお間に合せさへすれば、いま云ふ通りの樂しみ。さうなる時はコレ、わが身を男妾にして、氣樂にさせて置くわいなう。

ト丈八、呆れし思ひ入れにて

丈八　エヽ、あの娘御のお七さんを、七十兩に賣るとえ……イエ〳〵、それは好いやうな相談ながら、あまり浮いた話しでござります。

たけ　コレ〳〵、丈八、何が浮いた話しぢやわいの。

丈八　ハテ、いかにお前の育てた子なりとて、また自分に榮耀がしたいというて、あのマア可愛らしいお七を賣らせて、その上、婆、アの男妾とは……イヤサ、あのお七さんには、男があるぢやござりませぬか。しかも先は屋敷方で、キツとした云ひ號けの、男があるぢやござりませぬかいなう。

たけ　イヤ〳〵、その約束したは、死んだ此方の久兵衛どのゝ仕業。云ひ號けの男といふは、尾花染五郎といつた侍ひ。その後たしか名を變へて、ア、、磯貝藤助とやら、何を云ふも、親仁どのは死んだ事なり、その男も今では落ちぶれて、浪人して居るとの噂。サア、其やうな者にかゝり合つては、間に合ふものではないわいなア。

丈八　ハア、そんなら云ひ號けの男といふは、落ちぶれてゐするとな。それぢやというて、此やうに現在の娘御を、勤め奉公に賣られたのか。どこぞ好い男を持たせたなら、お前も樂隱居がしてゐられますぞえ、こりや賣らうより、その男がようござります。どうしてマア可哀さうに。

たけ　何が可哀さうな事があらう。コレ〳〵、あのお七はナ、十六年以前わしが、葛西の方に居た時、里に取つたあの餓鬼。その時分、ちつとした譯があつて、所にも居憎い事が出來たゆゑ、是非なう駈落ちしたところが、幸ひ世話する人があつて、お七がまだ十歳の時に、あの餓鬼を連れて、緣でがな八百屋久兵衛どのへ、後妻に入つた、このお竹。差當つた七十兩の金の入用といふも、いま云ふ通り、その品を買ひ求め、樣子あつて世を忍んでござる若旦那に、どうぞ出世がさせたし、又わしも樂がしたいからぢやわいなう。

ト此うち後へ太左衛門、古編笠をかむり、黒絹の單羽織、一本差し袖乞ひ浪人の拵らへにて出て來り、窺ひゐる。

丈八　イヤ〳〵、さういふ事なら猶以て、なんぼ親子の間柄でも、義理もあり、殊に世間へ對して、外聞が惡うござります。

たけ　なんの、外聞も當分もいつた事か。親仁どのも死んでしまうた事なれば、お七は養ようが燒かうがわしが勝手次第。モウ〳〵、わが身に相談はせぬ。深川の親方も來てゐる事なれば、是非々々、今日中に方を附けにやならぬわいな。

ト お竹行かうとして、草履の片々が無いゆゑ、あたりへ思ひ入れ。

丈八　それぢやというて、女のやうにもない、そりやあんまり邪慳といふものだ。

たけ　イヤ〳〵、もう〳〵何も云やんな。わが身には構はぬわいなァ……エヽコレ、わしが草履の片々を、先刻の盜人めが持つて行きをつたさうな。これなと穿いて行かうわいなァ。

ト 片脇にある、おさごの引摺り下駄を穿き、辻打ちになり、お竹を丈八とめるを、振り切つて下座へ入る。丈八殘り、思ひ入れあつて、

丈八　イヤハヤ、呆れ返つた代物だ。とんだ奴をつまんだ報ひか、おれが心をかけてゐるお七をば、賣

られては、あの婆アと跡でどうして夫婦になられるもんだ。餘ッほど自惚れな婆アめだ。もう斯うなつては、うつかりしては居られぬ。なんでもあのお七を引ッ浚ひ、八百屋の内の諸道具も引摺り出して、こりや江戸を走るより思案はないが、どうかまだ外に好い思案が、それともあらうか。

ト 手を組んで考へる。太左衛門、後より出て

太左　コレ〳〵、町人どの、それには至極好い工風がござるて。

ト 丈八、太左衛門を見て、

丈八　なんだ、見ればこなたは、袖乞ひの浪人どのではないか。

太左　成る程、拙者は尾羽打枯らした浪人でござるが、いま思はず後で承れば、おてまへ樣には甚だお心遣ひのやうな。それについては、拙者が存じよりの事もござれば、苦しうなくば御相談相手にならうかと存じまする。

丈八　それは忝うござりまする。何もかも聞かれた上は、隱す事もござらぬ。して、早速ながらこなた樣の企みというてはナ。

太左　サア、わしが存じよりの手段は……コレ。

ト差寄つて小聲に、いろ〳〵囁く事。丈八うなづき、承知の思ひ入れあつて

丈八　ムウ。イヤ、奇妙々々。さうすれば、わしが思ふ坪といふものぢや。

太左　それにしても、とつくりと云はねばならぬ事もある。アヽコレ、どうも爰では、

丈八　イカサマ、斯うしませう……イヤ〳〵、あそこの内へは婆アが行つてゐるし、いつそ池の端へ行きやせう。

太左　成る程、こつそり話し合ひには好い所でござる。

ト流行り唄の合方になり、丈八太左衛門・捨ぜりふにて入る。引道へて吉助、嘉助出てくる。

嘉助　モシ〳〵、親方、今日は、お掛合ひなされた奉公人でござりまするが、いよ〳〵お極めなされましたか。

吉助　マア〳〵、あら方取極めるつもりではあるが、ちつと不の附く事があるゆゑ、とても今日の事には行くまいてや。

ト矢張り合ひ方になり、お竹與七、捨ぜりふにて出て來り

たけ　商賣柄の事ゆゑ、お前の方に所々方々と口もあらうが、この間中からあの土左衛門どのが、お前を頼んでゐる一卷の事。すりやモウ、金高の事は、七十兩は承知でござります。その値段なら、

いづれわしが、きつと買ひ求めますゆゑ、どうぞそのつもりにして下さりませ。

與七　すりや、買ふと云はつしやる程の事ゆゑ、値段のところは、御承知でござりませうが、あの一卷の事は、先約がありますゆゑ、今さら返答も出來ず、近頃お氣の毒ではござりますが、どうもお前には御相談が、致し憎うござりまするて。

たけ　さうではあらうが、そこをお頼み申すのでござります。

與七　ハテサテ、なんぼお頼みだといつて、商賣づくといふものは、さういふものではござりませぬ。

たけ　その代りわたしが方は、殊によると金子は、今日直ぐに七十兩、爰でなりとお渡し申すやうに。

ト吉助を見附けて此方へ來り

オヽ、お前は深川の親方さん、いま高階屋へ行きましたが、間違うてお目にかゝりませぬ。ほんに丁度よい所であつた。モシ〳〵、定めて詳しい話しもお聞きなされたでござんせうが、只今七十兩といふ金子が、急にいりますゆゑ、アノわたしが娘を、お前の方へ、是非々々お買ひなさるつもりに、どうぞちつとも早う取極めを、致したうござんすわいなア。

吉助　アヽ、これはしたり、滅相な。そりやハヤ、玉も見た上で、氣にさへ入れば、隨分七十兩にも抱へまいものでもないが、何を云ふにも、肝腎の代物を見ずに、どうマア御相談が出來やうぞい。